

土

淨

號 月 九



金

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十六年八月廿日印刷納本 昭和十六年九月一日發行

第七卷 第九號

陸海軍 病院

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「淨土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の淨土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆ 全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆ 一口一圓二十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆ 毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆ 個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆ 御送金は淨土宗務所事務變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「淨土」に御芳名を掲載します。

精神文化全集

新し修養と放養
全集 約廿四卷
全集 約廿四卷

この全集は時局下の青年大衆に、父に、母に、工場に「ヨリ豊かな精神文化を」、「ヨリ高い教養と淑智」を「ヨリ新しい修養と處世のすべ」をのスターガンで現代日本の修養壇、精神文壇の各方面の代表的最高權威大家が總動員でその全著作中から會心の傑作代表的名著を選集し、又は書下しを輯めた、決定版選集で、各著者の化身であります

見よ！此權威！此網羅！

第一卷 井上哲次郎選集	第二卷 石丸梧平選集	第三卷 蓮沼門三選集	第四卷 秦賢勳選集	第五卷 本莊可宗選集	第六卷 帆足理一郎選集	第七卷 友松圓諦選集	第八卷 大倉邦彦選集	第九卷 加藤咄堂選集	第十卷 高嶋米峰選集	第十一卷 高神覺昇選集	第十二卷 谷口雅春選集
第十三卷 鶴見祐輔選集	第十四卷 永田秀次郎選集	第十五卷 室伏高信選集	第十六卷 上野陽一選集	第十七卷 桑木嚴翼選集	第十八卷 倉田百三選集	第十九卷 武者小路實篤選集	第二十卷 山田忍三選集	第二十一卷 小林一郎選集	第二十二卷 江原小彌太選集	第二十三卷 三宅雪嶺選集	第二十四卷 下村海南選集

戦争文學傑作集

堂々十四卷既刊！
明治大正昭和の戦争文學名
著の全的網羅各巻四六七百
頁豪華本各巻二圓八十錢
見本
進呈

絶讚の嵐！
怒濤の申込！

各巻大増刷成る！

詩人望久き
第三回本

友松圓諦選集

近代的鋭敏なる感覺と知性を以て眞理を人生を究明し説く氏の五大名著を選集し書下し三篇を収む。

第十五回突破版
第二本

谷口雅春選集

歡喜の人生觀、精神生活の至上道、人生に處世に必勝するすべを説く。氏の全著作の要約及未發表協稿の決定版。

第十六回突破版
第一本

室伏高信選集

新鮮激烈たる東洋的新思想、彼の雄叫びとしてその二天代表作「改訂版青年の書」と「新譯論語」を収む。

☆ 先づ全國書店で現本
☆ 一覽乞品切れの時
は發行所へ注文乞

一、全國書店へ申込の事
二、全廿四巻預約定價一圓九十錢
單册分賣定價一圓九十錢
但預約者へは優先配本す

内容見本 東京市小石川區小日向臺町
申込次第進呈す 振替東京一七四四三番

潮文閣



浄土九月號 目次

表紙……………鈴木金平

扉・目次カツト……………河村良孝

法然上人に物を聽くの會……………小西存祐(三)

浄土の秋……………吉田松三郎(一四)

法語 感話 仰せのままに……………伊藤宏天(一八)

關東大震災記念日を迎へ

防空訓練に寄す……………岸本綾夫(二四)

實話 或る病兵の手紙……………編輯部(三)

「臣民の道」小解……………(三)



信

仰

相

談

中村辨康(六)

新刊「法然上人とわが國體思想」……江藤澂英(五)

歌壇……與謝野晶子選(三)

俳壇……太田耳動子選(三)

柳壇……西島○丸選(五)

浄土まんが 初秋をのぞく……漫畫協團(六)

童話 勇敢なビボー……小林一(三)

先師を語る

福田行誠上人

増谷文雄

(六)

聖典講義 阿彌陀さまのことども……中村辨康(六)

會員 通 信……(六)

編輯 後 記……(六)

浄土九月號 目次

近刊豫告

中
村
辨
康
著

日常勤行式講讀

「日常のおつとめ」と經文の解説とを兼ねた便利な修養書！
座右に備へて正しい信仰に精進せられよ！

浄土宗で必要なお經文を全部納めて誰にでも解るやうに一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯とをあげ、それに中村師獨特の麗筆を以て懇切な解説をほどこし、更に字解までつけて一讀よくその深底を味ひ得るもの。會員各位の佛壇に供へて修養に最適です。僧侶各位の書架に一書を加へて手近かな修養の參考資料となり、説教その他の教材に最も便利です。

B6型クローズ装

價一圓五十錢

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

毎日のつとめ

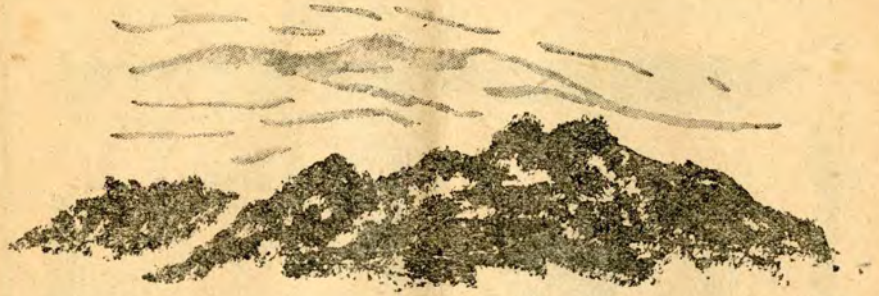
浄土宗徒必携の修養好伴侶

浄土

名利は生死のきづな、三途の鐵網にかゝる。稱名は往生のつばさ、九品の蓮台にのぼる。
法然上人御法語

九月號





先師を語る…6

福田行誠上人

増谷文雄

一

わたくしは、福田行誠上人のことを、これでもう四回にわたつて書くことになり、上人の偉大なりし人格、事業、識見は、まだまだその半ばをも書きつくしてゐないのであります。

あの偉大なりし上人の全貌を、少々、紙數をもつて描かんとすることは、畢竟

無理であると申さねばなりません。

だが、わたくしは、他の豫定の關係から、行誠上人の項をこの一回をもつて終としなければならぬので、こゝでは、特に私が感銘ふかく記憶してゐる事どもを、思ひおこすがまゝに、書きしるしておきたいと思ひます。

二

明治年間の奇僧として、ひろく名を知られてゐた佐田介石和尚が、ある時、上人にお目にかゝりに増上寺に参つたことがありました。

そのころ、介石和尚は、新しく西洋から入つてきた天文学である地動説に對して、佛教の天文学たる須彌山説を擁護するため

に、死もの狂ひの活躍をしてゐたのであつて、佛教關係の人をとらへると、誰でもかまはず、

「須彌山説が破れるやうなことがあつては一大事ですぞ。須彌山説が立たなければ、三界三十五者の建立がみな破れてしまふ。

三界三十五者の建立が立たなければ、佛教はことごとく虚妄に歸するの他はないではないか。苟も佛法を奉ずるものである

からには、起つて須彌山説を擁護して貰はねばならん。」と論じ立ててゐましたが、今日増上寺にやつてきたのも、この須彌山説の主張を上人において、強い味方になつてもらひたいがために外ならなかつたのです。

介石和尚が、口角沫をとばして論ずるのを聞いてをられた上人は、やがて、につこり笑つて、

「わしが宗旨は、究竟、極樂淨土に往生すれば宜いのでござるが、この極樂淨土といふところは、須彌世界中の國土ではござらぬによつて、須彌山が破裂したればとて、わが宗旨にはいさ

さかも關係はありません。」と仰せられました。

この言葉の中には、須彌山説が立たうが立つまいが、決して佛教の中心生命がそれによつて左右されるものでないことが、洒脱のうちに強く語られてゐて、介石和尚があまりに須彌山説に執することの不可が戒められてゐるのであるが、上人の仰せの通り、その後の佛教の姿勢は、須彌山説の没落にもかゝらず、御

承知のごとく、正法復興の途をあるいて、今日にいたてゐるのであります。しかも、上人は、この言葉について、次のごとく介石和尚に、付け加へて仰せられました。

「しかしながら、須彌山の説は、古佛の説き給へるところに相違ないのであるから、學佛の輩は、一應これを考究しておくことは宜しからう。」

佛法のために熱心奔走してゐる介石和尚の心情に對して、上人のふかい心づかひのうかがへる言葉であります。

介石和尚は、この言葉を頂いてから、あらためて須彌山説を研究し、つひに『須彌山略説』一卷を著はすに至りました。

わたくしは、この一場の會談の中に、上人の見識と人格とを、あはせ伺ふことが出来るやうに存じてをります。

三

持戒清淨、三學精進、この二者をもつて、佛僧本來の面目を發揚すること以外に、この上人の心にかけるところは尠かつたやうに存せられます。

介石和尚の須彌山説の主張も、この點から割り出して、この上人が重きをおかなかつた理由を理解できるであります。

明治初年には、耶穌教が新たに輸入されて、非常な勢で教勢をはつたために、佛教僧侶の大部分は、これが對抗のために大童

になつたものでしたが、行誠上人は、そんなことにも馬耳東風の態でありました。

「苟も内觀の正道理を解せずして、徒らに外防を事とする者は、殆んど雞狗の相闘ふ者と一般相異なることあることなし。所謂跼蹐堅固の識りを免れざるなり。」

耶蘇教對抗策に大童の人々に對して、こんな警告の言葉をすら與へられたこともありました。

ある時のこと、講經のついでに、上人は、聽聞者たちにむかつて申されました。

「近來、耶蘇教しきりに蔓延の兆がござつて破邪の演説なども大いに行はれてゐる様子でござる。だが、中には脆くも十字の軍門に降るものもある由。今日は一つ、拙僧がそなた方に、破邪の秘法をお授けいたさう。」

そこで一同は、耳をそばだてて、行誠上人



の授ける秘法とは何であらうかと待ちかねてみると、上人は、やほら口を開いて申されたものであります。

「それはなう。元來、外教徒などを相手にして喧嘩するから悪いのでござる。はじめから相手にせねば、決して負けるやうなことはござりませぬ。」

これには、一同のものたゞ呆然たる許りでありました。だが、この上人も、事一たび持戒清淨のことに及び、また三學精進のことになると、たちまち飄逸の態度を一擲し去つて、眞劍にまた熱心に事に當つたものであります。

それは、言ふまでもなく、持戒清淨、三學精進の二者を措いて、佛性本來の面目を發揚すべきものなく、正法恢興の方運を發見すべからざることを、上人がかたく信ぜられてゐたからであります。

四

明治五年四月廿五日、明治新政府は、太政官布告をもつて、

「自今僧侶の肉食妻帯蓄髮は勝手たるべき事——」

といふ所謂肉妻解禁の發令をいたしました。

この布告の精神は、恐らく、法律上において僧侶をも俗人と同様に待遇するといふことに存してゐたのであつて、決して肉食と妻帯と蓄髪とを僧侶にすめたものではなかつたと思はれます。

だが、僧侶もまた人間であります。自今僧侶の待遇を特殊にせず、俗人と同様に待遇するから、肉も食へ、妻ももて、頭髮ものばせといふことになると、人情の機微のおもむくところは、結局、肉妻の誘惑におちるといふことの外はありませんまい。

これは、持戒清淨を基として、佛僧本來の面目を發揚し、佛道復興の方策を立てんとした行誠上人にとつては、實に驚駭にたへず、まことに苦々しきことでありました。

そこで、上人は、一方においては、各宗の大徳に對して、ます持戒清淨ならんことを訴ふるとともに、他方、政府に建言し



て、この暴令を取消されんことを乞ふたのであります。

つぎに、その建言の一部をあげておきますが、今日においてこれを讀むも、なほ肺腑をえぐられる思ひがあるのでありませう。

肉食妻帯蓄髪勝手次第

右御布告の趣、恭承仕り驚駭に堪えず、謹て言上仕候。當時開化文明と唱へ、追々御改革を以て舊來の頑固を破り、數百年の執弊を革めさせらるゝ條、敬服感佩の至り難有奉存候。然るに今般姪肉蓄髪勝手の一條、何共難心得、恭敬順從仕申べくや否やの間、何分落着仕らず。之に依り一應愚存を述べ、御指圖を希ひ度候。愚存の趣旨左のごとし。

一、維新の聖政は公明正大を以て、御旨歸と成され候趣、恭承仕り難有儀と存じ奉候處、此度の御布告に於ては何とも解しかね候儀、豫々慶佛の儀は決して是れなく、安心仕り修業これあるべき儀、海内一統難有存じ奉り候。爾來追々同盟總堂等を取立、日新策勵能任候。右姪肉は勿



論持戒清淨を基とし、宗々の修業振も追々勃興仕り候様
 規律を立て講習の課業を定め、老若一同心配仕罷在候處、
 浮肉勝手の御沙汰之あり候に於ては、全く佛敎の戒律をゆ
 るべ、人情の利を誘ひ候處にて、教場の教導に差ひよき何
 共迷惑仕候。(以下六項目を略す)

この建言に對しては、のちに、次のやうな御沙汰がありまし
 た。

明治五年四月第百三十三號、僧侶肉食妻帯等勝手たるべき公布
 は、従前古來の所業を禁止せし國法を廢せられ候旨趣に止
 り、決して宗規に關係之なき譯に候條、此旨心得の爲相達
 候事。

このことは、なほ詳しく記せば限りがありませんが、要する
 に、上人が、持戒清淨のことに就いて、いかに眞劍であり熱誠で
 あつたかを伺ふべき一例となすに足るであらうと存じてをりま
 す。

五

上人が、三學精進のことに就ても、持戒清淨のことと同様に、
 熱心にかつ眞劍であられたことを語る一例としては、縮刷大藏經

の刊行といふ事業があります。

縮刷大藏經、正式にいふと大日本校訂大藏經の刊行事業のこと
は、すでに述べたやうに、明治年間における佛教最大の出版事業
でありましたが、この大業が立派に完成した裡には、嚴として
上人の人格と識見と熱誠とが存してをりました。

この事業は、表面は弘
教書院の事業といふこと
になつてありますが、實は
、この弘教書院といふの
は、この事業の遂行のた
めに設けられた出版社で
ありまして、その成立の
経路をしらべて見ます
と、島田善根翁の發願、
色川誠一氏の熱情、そし
て上人の徳望が中心とな
つて、佛教各宗共同の大
事業として、この縮刷刊行の業が遂行されたことが解るのであり
ます。

その事業の詳細は、いまこゝに述べる必要もありませんが、
その中で、色川誠一といふ人は、後には富士製紙の重役になつた



人でありますが、その當時は、米國から歸朝した許りの新進氣鋭
の事業家であつて、この事業の經營方面を一切引受けて活躍した
ものでありました。この人が、さかんに上人のもとに出入して、
この大業の畫策をしてゐたところのこと、ある人が、上人に對し
て、

「色川といふのは、徒らに大
言語壯する無名の一書生にすぎ
ないのですから、あんな男と一
緒に事業をなされては、恐らく
は、上人のお徳を汚すやうなこ
とになりはせぬかと存じます
る。」

と申上げたことがありました。
すると上人は、それに對して、
「たとひ色川にだまされよう
とも、大藏經刊行のためな
らば、拙僧の本望といふも

のでござる。」
と毅然として答へたといふことであります。それを、やがて色川
氏も漏れ聞いて、非常に感激し、必らずこの大業を完成しよう
と堅く心に決するところがあつたといふことであります。私は

この佳話によつて、上人の學佛に對する熱誠に、ふかくうたれる思ひをもつのであります。

なほ、この事業に就いて、特に記しておきたいことは、わが國における豫約出版といふ形式は、この刊行事業において初めて試みられ、しかも美事にこれを成就したといふ一事であります。

而して、全く前例なき豫約出版が、かく美事に成功したこと、専ら行誠上人の徳望によるものであつたことを、當時の關係者はみな認めてをります。

六

上人は、明治二十年十二月、總本山知恩院にあつて病床につかれましたが、翌年一月、病床のまゝにして、傳宗傳戒の要領をのべ、後鑑として遺さんことを企てられ、三月に至つて稿が成りました。名づけて『傳語』と申します。

その四月廿五日、病をおして、祖忌を修され、同日正午、頭北面西、右脇に臥し、奄然として正念往生の素懷をとげられました。時に世壽八十三でありました。

記しのごされた遺書の中に、

一、扶宗護法の志第一なること、常々みらるる通りなり。且とにかく平日なぐさみの様に讀書すべし。

との一項目があつたことは、既に述べたことでもありますが、

三學精進を策勵した上人の面影は、ここにも同ふことが出来るであらませう。

なほ、別の遺書には、多年隨從の法嗣福田循誘に、錫杖一枝、鐵鉢一口を附屬するとて、次のやうに書き遺されてをります。

右剃髮已來多年奉仕の勞を謝するまでにて、之を附屬す。立合の上、返納すべきものは此を返納し、護持すべきはこれを護持せよ。囊中の資財において、生前いまだ一錢を蓄積すること好まず。没後何の存するものかあらん。汝循誘、生涯清貧に甘じて、苟も濁富競位、當世碌々の僧徒の趾を履むことなかれ……但し一杖の鐵錫、一口の鐵鉢はこれを残すべし、汝の爲めに生々の依身を育するはこの二物にあり、是予が汝に分別する無爲の大福田なり。」

行誠上人の面目がまことに躍如として何はれる遺言であり、また、今日の僧分の、大いに反省すべき教訓であると、感銘ふかく存する次第であります。

(齋 藤 清 畫)

「臣民の道」小解

かつては社會の一人一人がみな自分の利益のために働き努力し、そして資産を増し私生活に豊かにしてゆくことが立派なことであるとされてゐた。ところが今では國家奉仕が第一義であつて、一億同胞の一人一人が力をつくして國のため、國の利益のために働くやうになつた。

しかしこの自我功利の思想から國家奉仕の考へに一日も早く移り切つて一億の國民が一つの塊りとなつて時局に當らなければならぬのに未だ完全に一つの塊りとなり終つたとは云へない所がある。だから今後とも舉國體制を確立するためには努力を必要とする。

こんど文部省で「臣民の道」と題する一文を編纂し發表した。これは今直ちにわれわれが實踐すべき具體的な事柄については述べら

下、臣民はよく忠によく孝に奉公のまことを致して來たかについて神代から歴史を基として述べられてゐる。

これは可成りの長文で、その内容は三章からなつてゐる。第一章は世界新秩序の建設で、世界史の轉換、新秩序の建設、國防國家體制の確立の三節に分れてゐる。ここに於ては近世初期以來の西洋文化の基調をなした個人主義、自由主義、唯物主義から民族主義、全體主義にと世界史が轉換し、新秩序の建設としてわが國の國際聯盟退却から三國同盟と推移して來つたことを説いてゐる。そして國家の生成發展のもととなる國防に關し、新體制確立の具體的目標が高度國防國家體制の整備であり、國家總力戰の強化であることを明かにしてゐる。

第二章は國體と臣民の道で、國體、臣民の道、祖先の遺風の三節に分れてゐる。先づ國體については伊弉諾ノ尊、伊弉冉ノ尊の二柱の大御業から解きをこし、肇國の精神を示し、畏れ多くも重ね々賜つた勅語の御言葉を受け、又は聖德太子の十七條憲法、神皇正統記等から臣民の道は神聖なる皇祖皇宗の遺訓と光輝ある國史の成跡とに鑑みて昭らかな點を示してゐる。

第三章は臣民の道の實踐で、皇國臣民としての修練、國臣生活の二節に分れ、先づ氣節を尚ぶ風を修練し、長期建設に耐へる精神と肉體の練磨をなし、佛教の鎮護國家の教へを初め各修練の道がある。そして飽くまで職域奉公を強調して、「皇國臣民の道は、如何なる職にあるを論せず、國民各々國家活動の如何なる部分を擔當するかを明確に自覺し、自我功利の念を棄て、國家奉仕をつとめんとした祖先の遺風を今の世に再現し、夫々の分を竭くすことを以てこれが實踐の要諦とする」と述べてゐる。(編輯部記)



淨土の秋

今朝もまた秋のやうな涼しい風が吹く。

このころは天氣を見定めては若い女たちが倉の箆の物を取り出して、縁側から庭の木立の間に虫干しをしてゐるので、いやでも故人の形見の物を見なければならぬ。子を失つた人、妻を失つた人、夫を失つた人、すべてが一年に一度虫干しのころになれば苦しい思ひをしなければなるまい。子を失つた人が、子供の物一切を家の中から出してしまつたといふ話を聞いたこともある。その親の心持ちも理解できる。イブセンの「ブランド」を讀むと、子を亡くしたブランドの妻がその愛子の形見の着物をたゞ一枚夫に隠してゐて、ブランドに叱られることが書

吉田 絃 二 郎

いてある。ブランドの妻のこの心持ちも理解できる。

×

形見を焼き捨てる心、形見を隠し持つ心、そのあらはれは二つであるが、悲しみは一つである。いづれの方法に生きても救ひはない。その救ひのない生活の裡からやがて悟りが生まれて来るであらうし、さらに深い迷ひもわいて来るであらう。

芭蕉翁の歿後、佛幻庵にこもつたまゝ三年、庵を出でなかつた丈艸は、壁に貼られた紀行やをりをりの消息を讀むのをたのしみに生きてゐたといふことである。かつてかれが芭蕉翁とともに歩いた旅の日



記や、師の消息をくりかへし讀み耽ることによつてかれはその悲しみから救はれたのであつた。かれも亦形見を抱いて、悲しみの、どん底に救ひを見出したのであらう。

形見を捨つるもいゝであらう。形見を大切に守るもいゝ。いづれにしても所詮人間は悲しみを失ふことはできない。もし悲しみを忘れ得たと思ふ人があればかれはすくなくとも眞人間ではない。

×

今日もわたくしは形見の品々を木蔭に干しながら終日庭に下りて犬と遊んでゐた。若い女たちは紅葉の梢から松の梢へ綱を張り、一つ一つの長襦袢や羽織や裾模様を丹念に懸けて行つた。

初秋を思はせる涼風が萩模様袖をかすかに動かしてゆくのをわたくしはじつと眺めてゐた。

×

このころ何處も野菜に困つてゐる。二三日前東京から友人が問うて来て、野菜難を訴へたので、近所

の畑の中を歩きながら恰度そこに茄子を取つてゐる農夫に茄子をゆづつてくれないかと話しかけて見たが、農夫はつひにゆづつてくれないかつた。後で家に歸つて聞いたことであつたが、近ごろ畑での賣買は禁止されてゐるといふことであつた。わたくし自身の迂闊さを恥ぢないわけにはゆかなかつたが、同時に人間の自然のまゝの美しさやあたゝかさが見失はれてゆくのが寂しかつた。

その友人は三鷹あたりに畑を持つてゐるので、毎日東京から三鷹まで畑の野菜を取りにゆくことにして、出かけて行つたが、三鷹に着いて見ると自分の畑の作物は根こそぎ荒らされてゐたと語つてゐた。末世のあさましい姿を見るやうな氣がしてならなかつた。

×

戦亂の世にはこのやうなあさましい末世的な姿を見るのも詮ないことであるかも知れぬが、しかしわたくしたちは人生に失望してはならぬ。どのやうにあさましい姿を見ようとも、その世相の裏には隠れ



たる幾多の美しい人間の心が動いてゐることを見逃してはならぬ。あまましい人間の心が動けば動くほど他の一面ではさらに美しい人間の心が動いてゐることに氣付く。

誰れにでも末世的なあまましい心はある。そのあまましい心に打ち克つてゆくところに人間の生き甲斐もあり、宗教もある。

×

鷹が峰に光悦の趾を訪ふたのは秋のころであつた。

妻と二人で來意を告げるとやがて鷹が峯を軒先に眺むる一室に通された。茶につゞいて數々の書や繪畫や茶器やが所狭いほどに運はれて來た。たいていは一度光悦に關する書物の中の挿繪や寫眞で見たもので、重要美術品や國寶に準ずるものもあつた。その主婦はわたくしたちの前に、その貴重な品々を置いたまゝ半時間経つても新屋にははひつて來なかつた。もし一品でも紛れ込むやうなことがあつたらと思ふとわたくしたちの方が心配でならなかつた。

數年前の鷹が峰の秋の一日を思ひ出すごとにわたくしは、今でもあの鷹が峰の主婦の美しい心を尊く思ふ。

人間が人間を疑はずに住む世界が淨土であり、人間が人間を疑ひつゝ住まねばならぬ世界こそ煉獄である。

×

昨日わたくしは犬を連れて武藏野を歩いてゐた。

陸稻の中を歩いてゐたをりはげしい驟雨が降つて來たので、わたくしは木立の中に入つて雨を避けてゐた。日が暮れて來た。雨はます／＼強く降つて來た。

どこでわたくしの姿を見つけたのか、森の近くのお百姓さんがわざ／＼傘を持って來て貸してくれたので、わたくしは雨の中を家に歸ることができた。

憂鬱なわたくしは心の俄かに明るくなつた。一人の人間の心が明るくされるといふことはやがて百人千人の心が明るくされることになる。一人の淨土心は千人萬人の淨土心はぐくむことになる。

わたくしは毎日武藏野を歩いてゐるので、この十



餘年の間には、かなり多くいろ／＼な武藏野の人たちと逢つた。しかし不思議にも親切であつた人たちの顔だけは忘れない。

親切に雨やどりをさしてくれた家、やさしい言葉で道を教へてくれた老人、冷たい水を振舞つてくれた老婦：それからそれと武藏野はわたくしに忘れがたい人間の美しい心を聯想させてくれる。かれ等こそ淨土の人々なのだ。

×

今年もすでに武藏野には渡り鳥の群は鳴き連れ、森から森を飛んでゐる。

秋の雲は漂ひ、葉鶏頭は紅に燃えはじめた。あたかも地上に何の變化もないかのやうに。

わたくしは武藏野を歩きつゝ不圖耕作地に佇んでゐる老いたる農夫や、夕暮れの空に見入る若い女たちを見出すことがある。國難に赴いた人々を思ふのであらう。嚴肅な秋だ。

×

小鳥はいつもの秋と同じやうに梢に鳴いてゐる。可憐な水草の花は静かな水溜りに白い花片をひろげてゐる。何も彼もが昔のまゝだ。

しかし一切の事象は靜かに忍苦の祈りをさへげてゐる。もしわたくしたちが深い省察の思念を凝らして、それ等の自然に接するならば、この秋こそ小鳥も哭し、水も歎秋しつゝあることを知るであらう。

一莖の草も俯向きつゝ永遠を思ひつゝある。一切が大いなる生みの惱みに向つて、吐息しつゝある。

小鳥の聲も白い雲も、いつもとは異なる深さと哲學を感じさせる。

わたくしたちはこの秋こそさらに嚴肅な心を抱いて一切の事象を見守らなければならぬ。今こそ生死の一念に思惟を凝らすべき秋だ。今こそ最も人間らしい美しい心に生くべき秋だ。今こそ淨土心に生くべき秋だ。

見よ小鳥の聲も水草の花も今年ばかり嚴かな秋はない。

法 語
感 話

仰 せ の ま ま に

伊 藤 宏 天

「仰せのままに、マキは明るう死んで行きま
す……」

眼がしらの熱うなる言葉です。咽喉がつま
つて急に返事が出来なかつたのです。たゞ、
心からなる合掌を手向けました。悲しくも又
うれしい知らせで御座いました。

實のところ、覺えの悪い私は、この「マ
キ」と呼ぶのが、姓の牧さんなのか、名のマ
キ子さんなのか知らないのです。お顔さへも
「アノ方かいナ」と思ふ程度で、よくは思
ひ出せないで御座います。然し、私への最
後のお言葉が、「マキは明るう死んで行きま
す」とのおことづつてなので御座います。

「マキは明るう死んで行きますと、何うぞ伊
藤先生にお傳へ下さい」

病床に於ける彼女の最後の言葉だつたのださ
うで御座います。そして彼女は○月○日明ら
う死んで行かれたさうで御座います。
早くから胸を病まれて、知多の共生園で、
田中先生のお手に纏つて、心靜かに療養して
居られたのです。私の知遇は此の時からで御
座います。其れも、何ちらが先であつたか知
りませんが、縁につながる妹と同室されて
からの、おなじみなのであります。

其の後、少康を得られたのか、一たん知多
を去られたのであります。矢張り、あまり

およろしくなかつた様子で御座います。

去年の二月です。宮城縣での用事をすまし

東京まで戻り、驛頭で妹に會ひました時、

「お兄さん、一と汽車のばして頂けません
？」

「出来ませぬ、然し、何うして？」

「マキさんを見舞つて上げて頂き度いので
す。もう何うやら長くないらしいのです。本
人も、うす／＼感じて居るのですが、最後
に、お兄さんのお話が、も一度伺ひ度いので
すッて」

「其れはお氣の毒ですネ。けれど、あとの豫
定が組んであるから、あなた、よく慰めてて
下さい」

「行くつもりで居りますけれど、一人で行く
のは……」

「何故ですか」

「もう、いけないいつて解つて居る人に、大丈
夫ですヨなんて氣慰めも云へないし」

「そんな嘘を云つてはいけません」

「其んなら、もう駄目よと云ふノ」

「其うだ、明るう死んで行けと教へるのです」

「マサか、重病人に死ぬことなどをして…」

「否、遠慮は入らぬ。本人は既に感じて居る筈です。正直に云つて上げなさい。其れが親友の真心です。」

「何う云ひます」

「何う云ひます」

「何う云ひます」

「何う云ひます」

「何う云ひます」

「何う云ひます」

「何う云ひます」

用をすましたら、仰せのままに歸つて行くば

かりです。此の道理をよく味つて貰つて下さい。死ぬと云ふことは、御用をすまして、親

です。反逆者にならぬやう、氣儘者にならぬやう、如來の從順な赤子として、明るう生涯を閉ちて下さいませやう、伊藤



元へ歸ることです。用のすまぬのに無理に歸る(自殺)人は反逆者です。用がすんで居るのに歸り度く無いと云ふ(執着)人は氣儘者

に、もたらされる筈です。満天下のお醫者さまが、其の面目にかけ、血まなこになつて、

が云つたと傳へて下さい。マキさんが二十幾年(或は三十餘年?)の生涯、而も、其の半分は病床に、つまらぬ仰せを頂いたやうに思はれるかも知れません。然うでは無いと存じます。やがては、此の地上に、病無き姿を築き上げるための、尊い置き石の一つとなつて頂くのです。決して無駄では御座いませぬ。マキさんの病を見ることによつて、何人ものお醫者さまが、よい研究を重ねられた筈です。其の結果は、何年の後か、幾十年の後か、其の程はわからぬけれど、いつかは、病無き姿を、この地上

今はげんで居られることの一點は、結核菌を殺す薬の發見です。年々何萬人と云ふ有爲の青壯年が、この目にも見えない細菌のために倒されて行く、これがお醫者として黙つて見て居られることでせうか。斯うした聖業のお相手として、尊い使命を果されたのです。マキさんは、マキさんで無くては出来ない御用を完全に果して、御用がすんだから、今まさに歸つて行かうとされるのです。よろこんで歸つて貰つて下さい。明るう死んで貰つて下さい」

ホームで話し始めて、中ほどからは客車の内と外での對話で御座いました。死生觀を説くあたり、窓わくにしがみついで聞き入る妹、隣席の乗客を忘れて話し込む私、思へば、マキさん一人を明るう死なせて上げたい心一つで御座いました。

時に發車信號のベルはけたましまし——
「ではマキさんへよろしくネ」

「エ、左様なら」
「左様なら」

列車は徐ろに動き出した。

妹は後ろに消え、暫らくは「マキさん」の事を思ふ。

まことにすまぬ話ですが、其れ以後約半歳「マキさん」のことをスツカリ忘れて居たのですが、其の間に妹は二度ばかりも見舞つたさうで御座います。そして最後の時に、「仰せのままに、マキは明るう死んで行きます、と、何うぞ、お兄さんにお傳へ下さい、と、やせ細つた兩手を胸に合されました」

と、妹から、私への言つてを聞かされた時は、マキさんが明るう死んで行かれた後の幾日目かでありました。

仰せのままに明るう死んで行かれたマキさんは、結局は如來光攝の裡に、明るう、永へに生きて往かれるので御座います。

此の確固たる私の「死生觀」は

生けらば念佛の功つもり、

死なば淨土に參りなん、

とてもかくても此の身には

思ひ煩ふことぞなし

と思ひぬれば、死生共に煩ひ無し

の御法語にもとづくものであります。この御法語は、説教法語には必らずと云つてもよい程に、引用される有名なものであります。大方の人は、今様調の「生けらば……煩ふことぞなし」だけを出されるので、私としては聊か物足りません。其のあとの「と思ひぬれば、死生共に煩ひ無し」とところに私は千金の重みを感じるのであります。

斯く、思ひ定め玉ふまでに、死生共に煩ひ無きの心境に達し玉ふまでに、如何ばかりかの苦修練行を重ねられたことであらうと思ふとき、無性に嬉しくも又慕はしく思はれるのであります。私自身を反省いたしましたして、青年血氣の暴勇で無く、沈思靜慮のうちに、死の恐怖を除き、生の歡喜にひたれるやうに成りかけたのは、五十に手の届かうとする頃からであります。

最近、若い學生さんの書かれたものを調べ

て居ました時、陸軍大臣の戦陣訓が大分に引用され、殊に、其の「死生観」の條が、青年の心を捕へたかのやうに思はれましたが、法

然教徒としては、この死生達観の御法語が強く響いて欲しいものであります。傳道の途上、よく聞くことであります。

ZEN



人間は死んから
どうなります

死んだ先は何うなるのか知ら、茲に大きな不安があり、恐怖があるやうで御座います。宗教としては此の疑暗を除くのが半面の仕事のやうにも思はれます。そして他面に「生の歡喜」を與へることが、より大きな使命であると考えます。ここに死生達観、即ち、死生共に煩ひ無しの大安地に住ることが出来るのであります。

嘗つて或る法事の席で「和尚さん、丁度好い折ですから伺ひます、

が、人間死んだら、もう一返、人間に生れられないものでせうか」

其れがお齋を頂いて居る最中だったので、私は箸を置いて、其の人の顔を見ました。多くの人は、何所へ行くとか、何うなるとか聞かれるのに、もう一返、人間に生れられないのかとは變つた質問であります。冗談か戯れか。決して其うでは無かつたのです。其の方は檀家のお一人ですが、家事と雑務に忙殺されて居て、謂ゆる貧乏暇無しで、お寺参りも説教聴聞も、人並に出来兼ねるので（思ひながらも）もう一度、人間に生れ返つて來ることが出来るなら、せめて來世は、ゆとりのある家へ生れて、人並に、お寺参りや説教聴聞がさせて貰ひ度いと云ふ、素直な心からの質問とわかりました。素直な方ですけれど、無學であるし、佛教的には殆んど聞いたことが無い人なので、其の方を一度で得心させるやうな切實な答辯を考へて居る瞬間、其の向側の席に列んで居たお婆さん、其れはお寺参りの御定連であります、其の方が心導願

に、代つて答辯を始めて呉れました。

「お前、それ、何を云ふのや、人間に生れるのが、其んな、ナマヤサイ事でも出来るものかいな、宿縁開發と云ふてナ、仲々の善因縁が整はにや、生れさせて貰はれ無いのやぞ」

「其うやろか」

「お前等、お説教聞いたことが無いから、其んな呑気な事を云つて居るけれど……」

「其んなら、わし等、この次、何所へ行けるやら」

「マー、犬のお腹が精々やろナ」

畜生道だと打ちやられても、別段、腹立つた様子も落膽した様子も無い、お人好しの此の田舎の婦人を見守つて、私は聊かガツカリしましたけれど、一同はドツと笑ひくづれました。賑かな法事の席であります。斯うして取り止めの無いやうなもの、素人同志の信仰座談會も、切り廻し方では仲々有意義なものであります。一としきり、素人同志の討論を交して貰ひ、最後に私が一とまとめにして座を結んだので御座いますが、對手の方に、

「お前などは畜生道が精一ばいだよ」とばかり、投げつけた點は餘りヒドイと思ひますが、人身受け難しを心得て居ることだけは、たしかに日頃聽聞の甲斐であらうと思はれました。

「何所へ行く」の質問に接した時、私は「何所から来た何うして生れた」と反問するのを常と致します。特に若い人は此の方が近いやうです。老人は先が近いとか云つて、行く先を心配する。其の道が塞がつて居るやうでは大變ですから、其の前途を開示することも必要ですが、若い人は寧ろ前途遙遠で、先の行き詰りは感じません。其れよりも、後ろの戸口が近いから

「何所から来たか何うして生れたか」を解いて、前途を明示しようと思ひます。其の結論が私の死生觀で御座います。生れるゾと頑張つたためしも無ければ、生んで下さいと頼んだ覚えも無い。要するところ「知らぬ間に生れた」であります。生んだ親さへも當初の程は「知らぬ間に妊んでゐる」のが世の常の

姿であります。この「知らぬ間」を何と解くか。

私は、直截簡明に、此れを「佛わざ」と頂き通して居ります。もとより「知らぬ間」のことです。色々と考えて見ましたが、此れより外に云ひやうが御座いせん。何うしても佛わざであります。これでハツキリと割り切れた感じですよ。始めて落ちつけた喜びを感じます。私の「生れ得たこと」は全く、佛わざで御座います。

故に、仰せのままに出て来たからだ、仰せのままに働いて、御用がすむだら、仰せのままに歸つて行くばかりです。如來の教へ、善逝の詢へが味へるやうであります。この仰せのままが「南無」であります。歸命と譯します。詳しくは「歸一命令」であります。徹底した南無の生活、專稱南無の宗風、全く、死生共に煩ひ無き大道こそ、南無に消息する私達の安住の地と確信致します。

歌壇



那須市 大城 有都

酒飲めば酔ひにまぎれて忘るるも
覺むれば懐ふ亡き妻のこと
評 女らしき情にあらず、人間の眞情はかくてこそ尊し

廣島 上原 四四人

門川の水嵩ましてひねもすを瀧の
鳴る底に石まらぶ音
評 凄じい水聲が、底に石まらぶ音で想像される、大雨のあとの危い感じに立つ作者の感動が傳へられてゐる

用箋をせましと母の拙き字思ひの
ままたに感られたるかな
評 作者は親しい微笑をもつて、母上の手紙を眺められたことであらう。自由闊達な筆蹟を見て仰ひ仰ひした心地にもなられたことであらう

北海道 平井 正念

五月晴れ今日の上き日を歌ひつつ
はらから集ひ茶を摘みにけり
評 北海道 中村 茂舞

長野縣 宮澤 圭子

今朝の寢さめ清しも今日もよきこ

とある如く我が心足る
金澤市 有側 芳子

身の限り動くこともかなはず
しき中に我は病むかな
東京 細田 初枝

われはただまばゆき人をねがはず
て強くやさしき母とならまじ
堺市 笠井 松枝

嶽あらふ小川にうつらふ夕月の波
にくだけで秋風ぞ吹く
奈良縣 寺田 定信

二年の病にいまは死も生も思はず
なりぬ念佛たのしも
京都 望月 久次郎

大空をうち傾ふけて昨日降りし大
雨にいよよ梅雨あけんとす
京都府 福島 孝治郎

階のさくら眞白に咲き照りて玉
砂利遠く人影の消ゆ
大阪山科 百子

主人此たび戰死す
皇國のみたてとなりて散りし君
さを高かり御魂安かれ
大阪府 堀江 富光子

つつましく生きてや行かむ身はた
とへ世の荒波にもまれゆくとも
北海道 中村 もん

明けのこる月を脊にして草を刈る
朝のしじまを遠溪のおと
京都市 白峰 敏夫

青葉照る日なたの縁に袋縫ふ母の
白髪が目立つ悲しき
北海道 花田 順往

波風の收まりはてし海を見てかく
あれかしと世を祈るかな
兵庫縣 萩野 一雄

田草終へ憩へる今日を心地よく雨
を聴きつつ慰問文書く
長野縣 宮澤 榮子

ここかしこ桑こく人のにぎはひし
鳥もひそと眞晝になりぬ
愛知縣 鷺津 研順

光塔のちらりと見えてつかれたる
脚はやめゆく青葉坂路
東、京 梓 柄子

日の本の國のすがたのたのもしや

み空ゆたかに鯉のほり立つ
山口縣 宮崎 貞女

すぎし世の如何なる罪のむくひぞ
や人にもまさる惱み多きは
栃木縣 光 明子

草草と共に芽ばえよわが眼國に捧
げて盲たれども
東京 無名 子

納衣をばかなぐりすてて國のため
君は征くなり歡聲の湧く
茨城縣 清水 謙太郎

さびしさに今日も出て見ぬ丘の上
の一本松に洗む太陽
北海道 清水 保子

かの君の晴着をせめて縫はしめよ
我はいやしくわざもなけれど
大阪 西島 春人

寝つくまで苦しんだりし病める子
のよこれし顔に寢息ととのふ
東京 船津 定祐

我れ病みて長きに倦めるこのころ
に友のいたつき聞くぞさびしき
兵庫縣 水谷 良子

蛙鳴く里の夕べにただ祈るみのる
秋まで恙なかれと

投稿規定
はがき一回二首以内とし
「淨土」編輯部歌壇係あて
に送ること

關 東 大 震 災

記 念 日 を 迎 へ て

防 空 訓 練 に 寄 す



忘 れ 得 ぬ 震 災 の 教 訓

弛む心にねちをまけ

これはかの關東大震災の直後に生じた一般の浮華輕兆の風俗に對して戒めた標語であつた。昔から油斷は大敵と云ひならされ今も昔も心のねちの弛み勝ちなものには大いに警戒を要することである。従つてまた戰陣訓にも「一瞬の油斷、不測の大事を生ず。常に備へ嚴に警めざるべからず不注意も亦災禍の因と知るべし」と云はれてゐる通り、平常から十分に氣をつけてゐる積りでゐても尙油斷は生じ勝ちである。とかく心の片隅から頭をもたげたる油斷と云ふ

陸軍大將

岸 本 綾 夫

大敵に對しては如何ほど警戒しても警戒し過ぎたと云ふことにはならない。

もともと警戒なるものは、何かゞまさに起るに違ひないと云ふので今から警戒しておくといふものではなく、起るか起らぬか判らぬからこそいつも警戒してゐる必要があるものである。

さて大正十二年の關東大震災はまさにわれわれにとつて最も忘れることの出来ない痛烈な教訓であつた。今から丁度十八年前の九月一日、突如襲ひ來つたあの大地震の一ゆれで、われわれの身邊にどれ程の悲惨なものを齎らし來つたか、われ／＼にはまるで一昨日の出來事であるかの様に

當時のことが今もなほ明瞭に目に浮んで来るのである。

すでに消し止めたくも防ぐに術がなくなつて成りゆきにまかせたまふ炎々と燃えさかる焔が、夜に入り四方八方の大空を紅運に染めて物すごく、その業火にも似た怒れる火焔に追ひに追はれて道を失ひ逃げ迷ひ、彷徨し廻る幾萬の老若男女の姿はまさに焦熱地獄そのまゝを現出したのであつた。初めは一家揃つて避難したものが、人にもまれて何時か互にはぐれてしまひ、轟々と天地を揺す破滅の音に混つて、或ひは親を兄弟を、或ひは子供をと混亂の渦巻の中で互に探し求めて呼び叫ぶ悲痛極まる幾多の聲が、遠くに近くに何時はてるともなく續いたことが、未だわれ／＼の耳に残つて去らない。

そして漸くのことに騒擾が鎮つてみれば昨日まではあれ程繁華を誇つた街々が一塊の瓦礫と化してその面影もなく、見渡す限り視界をさへぎる何もないたゞの焼野原となり、あちこちに遂に猛火から逃がれ得なかつた人々の焼けた屍が累々として横はり、川にも多く浮ぶといふ惨状を呈したのである。

人心の弛緩が惨事の原因

過ぎての後に思へば如何にも残念なことはかりであつた。私はあの時千葉にあつて聯隊長を務めて居つたが、急遽出動を命ぜられ、聯隊を指揮してたゞちに上京した。そして灰燼に歸した帝都に任務に就いて、つぶさにその惨状を目撃し、つくづく當時の社會的缺陷を目のあたりにし、今にして忘れ得ない深刻な印象をきざみつけられた。申すまでもなく當時は自由主義の全盛期であつた。人心の弛緩並びに墮落はその極に達し、あたかも弛める心のねちを叱る天の意志に對して全くなすべきところを知らなかつたものと云へよう。

もしも平常普通の防火又は消火の手段を講じさへすれば譯もなくあの惨状を相當防止出来得たものと考へられる。その事すら爲し得ないで帝都の人々が全くその度を失ひ慌てふためいた結果があつた惨状を招いたに外ならない。だから消すどころかむしろ火を煽いで、禍を大きくした様なものであつた。冷靜を失つた人心の如何に恐るべきかはこれに依り充分察せられるところである。

その後毎年九月一日の記念日には幾多犠死者の冥福を祈り當時を追憶して、この良き教訓を忘れぬ様、更にこの災禍を轉じて禍となすべく種々な企が行はれてゐる。しか

し今後は断じて帝都は勿論のこと日本の如何なる土地に於てもあのやうな惨状を二度とは招来せぬやう覺悟を要する。

あの折焦土と化した街を歩いてあちこちに消防自動車が焼き捨てられてゐるのが見られた。あの様な際には平常の消防自動車の力だけでは到底防ぎやうもなかつたのである。これは何うしても東京市民の一人々々が心を合せて協力して當らねばならなかつたのである。ところが實際には、大部分のものが譯もなく自分の職場を離れ、わが家を捨て去つて逃げ迷つたのである。だがしかしほんの一部の人達が一致團結して消火に努め結局その區域だけの類焼をまぬがれた例があつたことをみても如何に團結と協力が肝要であつたかゞ一層明瞭にならうと思ふ。今から考へると全く恥しい次第であつた。

しかし學校や會社に於ける團體訓練は可成り容易であらうけれども、一般の人々の團體訓練は仲々難しいものである。難しいといつても矢張りこうした事難に處するためには平素から萬全の用意を整へておかななくてはならない。用意と云ふことは丁度鳥を獲る網が、鳥のかゝる網の目が一つだけだからと云つて一つしか目のない網を張つては鳥は

獲れず、直接には鳥のかゝらない多くの目を持つ網を張つてこそ初めてその内の一つの網の目に鳥がかゝると同じ譯で、一つの突發事故からわれわれを救ふには不斷のゆるまない用意と努力が拂はなければならない。

震災以上の危険迫る

さて九月一日の關東大震災の記念日を迎へて、われわれはこれを一つの教訓として記憶すればよいかと云ふに決してさうではない。

即ちわれわれの心がけ次第によつては、今後に於ても幾回でも關東大震災と同じ様な、いやそれより優かに大きな災害に見舞はれるだらうと思はれる。

その最も身近な例としては敵の空襲が即ちそれである。

若しわれわれに右のやうな充實した用意がなされてゐなかつたら、たゞ一回の空襲に於ける數個の爆彈投下だけによつて關東大震災以上の惨禍をまねくであらう。それと反對に若し確固たる用意と手段が講ぜられてゐたなら、たとへ幾千の爆彈を受けても、これを受けたその場所だけの損害で済まされることゝならう。

大震災は僅か一回しか起らなかつたが空襲は連日連夜に

互つて繰り返し見舞はれるかも知れぬし、一回の空襲だけで一萬個以上の爆弾焼夷弾が落下されたといふことが外國電報によつて報ぜられてゐる。

こゝに於てわれわれは萬難を排し、あらゆる手段を盡して、敵の空襲に對處し得る確固たる自信を持つことが如何



に緊急且つ必要なことであるかゞ判るであらう。それ故に毎年この月には各方面で個別的に、又は総合的に防空訓練が眞剣に實施せられ、その結果は相當な好成績を擧げてゐるやうに思はれる。

防空に必勝の信念が第一

こゝで防空訓練の細かな手段や方法について研究しようとは考へないが、最も重要な事柄について一、二の注意を述べてみよう。先づ第一に、訓練とは實際の場合に當つてのことゝその趣を異にしてゐるかの様に誤つて考へられ易いことである。かゝる誤つた考へに基づいて一通りの訓練をさへやつておけば、實際の場合に當つても情況に應じよく臨機の處置をとり得るだらうと考へるものがあつたとしたら、それこそ本末を轉倒した考へであると言はなければならぬ。前線に於ける皇軍が赫々たる武勳を輝かせてゐるのも、御稜威によること勿論ながら、更に皇軍が平素から並々ならぬ訓練を積んでゐるからに外ならぬ。

平常から寸暇を惜しみ肝膽を砕いて千磨必死の猛訓練を行ふところがあつたればこそ、この度の實戦にお役に立ち得たのである。

一つの實行は百の訓練から生れるのであつて訓練を怠つてゐる様なものには實際に當つて何一つ出来得るものではないのである。一にも訓練、二にも訓練、しかも千磨必死の猛訓練が是非とも必要な所以である。

かくの如く訓練を重ねてこそ初めて必勝の信念が生ずるのである。わが皇軍は何時如何なるところにあつても必勝の信念を堅持してゐることが一つの特徴である。防空防火の際にしても何時如何なる場合も必ず消し止めると言ふ必勝の信念が必要である。即ち自ら信じ毅然として戦ふ者常に克く勝者たり得るもので、防空防火にもこの信念がなくてはならぬ。又逆に周到なる訓練を重ね、必ず勝つゝの實力を涵養してこそこの信念が生れる。

訓練の根本は團結と協力

而してこの訓練を實施するに際して、その手段方法に熟達することはもとより大切であるが、更にその前に團結と協力を強固にするやうに着眼することが肝要である。僅か

な訓練の日数にあつては、一つのことを實施するのにしても何うしたならば團結と協同の精神を少しでも多く養ふことが出来るであらうかと云ふことが根本の問題となつて来る。これまでの防空訓練をみるに、いろいろの方法手段の方策については種々の努力が拂はれてゐる様であつたが、たゞそれだけに止つて團結と協同を強固にするといふ方面に十分注意されてゐなかつたならば、折角の訓練に魂のかける慥みであらう。しかも平素は餘りこの方面の訓練を行ひ得ない人々であり、境遇や素質を全然異にした人達の訓練だけにこれが最も重要なことであつて、しかも一番難しいことなのである。

この團結と協同と云ふことを一言にして云ふならば滅私奉公の精神である。すなはち各人が生死利害を超越し、お互ひが相信し、相援け、自ら進んで苦難について、戮力協心相携へ、目的達成の爲に努力することなのである。各自めいめいが考へると或ひは不十分と考へ、或ひは上策でないと思ふこともあらうし、又は仕事の都合で樂なところも難しいところもあるに相違ないが、さらばと云つて各自めいめいの氣の濟む様に配慮してゆく譯にはゆかね。

たとへこれでは間違つてゐると思つてさへも、指揮者の

指圖通りに働かなくてはならぬのであつて、各自はめいめいの自我を少しも出さずに、皆のために進んで働くやうにしないで、團體の動作は出来ないものである。

つまり團體行動をなすに當つては全體のためには己を没し、欣然と協力するの精神を發揮しなければならぬ。

指揮能力と任務の理解

かやうなことは言葉で表現され、聞く者が十分に納得したとしても、たゞそれだけでは何の役にもたゝないし動作として實際に行ひ得るものでない。何うしても訓練に訓練を重ねて、その結果自然とその動作が團體行動に叶ふ様に團結と協同が現れ出て来るやうにならなくてはならぬ。殊に防空訓練の如き、敏速にして整々たる動作を必要とするものにあつては更に一層大切である。次にこの一般の團體行動を指導し、指揮して行く人の側について云へばその人が他の人の上に立つだけの十分な準備と能力とを備へて欲しい。指揮する人達は申すまでもなく訓練の樞軸であり、それだけ責任が重大なのであるから、總ゆる場合を考慮してよく準備を整へまた平素から指揮能力の向上を圖るやう努力しなければならぬ。そしてことに當つて熱誠

にして百行の模範たるべき自信を持つに至らなくてはならない。その他細かな點については略するが、たゞ一つ動作をする人々が自分の課せられた任務をよく理解し納得してゐることの大切さについて附言しておかう。誰しも大いに働かうと云ふ氣持だけはあるのだが、自分の任務について十分な理解がなかつたために動作の圓滑を缺くやうな場合が間々見受けられた。實をいふとこの任務を理解することは仲々難しいことなのであつて、自分の受持つ仕事の順序や方法を知つてゐただけで十分だとは云へない。どんな小さな一部分を擔當するにしても、凡そのところ全體のことも承知し、そして自分の仕事の位置と意味とを納得しておかなくては己が任務を理解したとは云へぬ。

従つて指導者の側も各自によく理解のゆく様努めてやり、その仕事には進んで心魂を傾注し、一々指圖されずとも一切の手段を盡してことの達成に努力し得る如くさせる必要がある。

臨機の處置に獨斷も必要

以上團結と協力の必要なることを述べたが、更に獨斷專行もまた重要なのである。多くの場合突發的に來襲する爆

彈を防ぐのが防空防火であるから、實際の場合獨斷を必要とするのがすこぶる多い。

爆彈の空彈を受ける場合は別として、その飛火から免れるためにはよく獨斷をもつて臨機の處置をなすを肝要とする。勿論そこに指揮者が居ればその命令に従つて行動が出来るがさまなければ敏活機敏を要するこの際に獨斷を以て行動すれば、一人でよくこれを防ぐことも出来る。團體訓練と獨斷專行とは決して異つた二つの行動ではなく、根本は全然同じのものである。

又近頃セメント、木材、鐵、等の資材が不足して防空設備、用具に充分でないと云ふやうなことを耳にするが、實は資材の不足は問題にならぬものである、ものが充分にあつてその上で手段を講ずると云ふことではなく、ものがなくて、道具が不足してそして消すといふのが防空防火である。

事實物も道具もなくて充分なし遂げ得るものであるし又さうなければならぬ。要するに防空は道具によつて行ふものでなく人の心、つまり團結と協力、獨斷の臨機の處置により敏活且つ適確にその目的を達すべきである。

横議をやめて臣道實踐

次に直接防空には關係のないことではあるが時局の緊迫と共に近時或ひはロシヤ問題とか南方問題とかと唱へ責任もなく事情も知らぬ人々が徒らに横議批判して、町の噂を作る事に大に戒めねばならぬ。

かの震災に於て流言蜚語が如何に恐ろしいものであるか、僅かな事柄から流言蜚語がどんな力を持つて來るか、十二分に苦い經驗をもつて居るものである。この責任もなく横議して廻る事がどんな結果を招くか實に恐るべきものであり、内部混亂を招來する最も有力な原因である。我々は常に身も心も冷靜を保ち、務めて平靜に唯々臣道實踐を心掛けて居るべきである。職域奉公も要するにこの臣道實踐に外ならない。しかしていざと言ふ場合毅然として事に當り、よく己が任務を達成することこそ肝要である。かゝることは今すぐの問題であり少しもゆるがせに出來ない問題である。

以上關東大震災の記念日を迎へ、又近く實施される防空訓練を前にして、求めに應じ一言所感を述べた次第である。



俳壇
太田百助子選

京都市 愛發 紅芽
魚板かすか亂蟹池を越えにけり
評 上五字によつて境内の廣さを思はせて
ゐるのもよしが「亂蟹」の表現が更に
よく、それが池を越えゆくのは壯觀で
あらう。

岩園市 長岡 白朝
懐にまだ／＼實梅拂ひて
評 童心がしのはれてほゝえましい。

栃木鳥山 大 隆 清
蟬の飛ぶ音わびしさと雨續き
評 「わびしさ」と雨續きの表現には多少
重複の嫌ひはあるが、蟬の飛ぶ音を聞
いてゐるのが良い。

大森 森田 法 晃
薔薇の繻くづるゝときを見たりけり

京都 永田 七 郎
此の病どうなとなれや時鳥

大阪 秋 芳
ねむの花ほのかに堀の灯と浮び

青森市 高松 英 紀 子
熱ひく朝はしづかに合歡咲けり

初蟬の聲も明るし母の里

茨城 眞木 謙 太郎
つゆがさびし濁江の草のゆれく

名古屋 鷲津 研 順
堀外は小さき流れ花栢留

福岡 一田 牛 敏
炭坑の町に聳えて夏の山

北海道 花田 順 往
御佛に今日は甘草捧けけり

兵庫縣 萩野 兔 月 峰
こゝろよき午睡に水の音通ふ

島根縣 石 見 千 翠
ハシカ病みて炎の呼吸や蟬の聲

鳥山町 大 隆 清
雨の中追ひつ追はれつ蝶々かな

京都 市 拜 郷 賢 三
植込みの缺の音に蟬やみぬ

今治市 三 木 光 子
夕闇の漂ふなかの麥埃

山口縣 山 本 憲 天
朝光の茂りに塔の美しく

大阪市 森 正 義
七夕の竹のテルテル坊主かな

今治市 三 木 光 子
いそ／＼と今日の外出や單帯

觀音寺 横 山 静 女
入梅の相々傘の男の子

小樽 平 井 正 念
水屋の暖簾の奥や夏景色

東京 船 橋 定 詔
ちらほらと山茶花白ふ林行く

京都府 村 上 天 紅
川風は涼しきものや夏の月

飯田市 中 山 舟 月
涼しさにつひまところむや寺の晝

福島縣 源 谷 静 山
箱は大日本の姿なる

堺市 笠 井 松 枝
蟲寶や煙管をかみて應對す

兵庫縣 水 谷 よ し 子
足洗ふ暗さを螢二つ三つ

東京 渡 邊 一 念
青嵐なきて鶏舎の静かなる

大分縣 石 堂 柑 山 生
常會の田植やけして擲ひたる

神戸市 古 賀 長 善
いてふ若葉背にしては君憶ふ

東京 第 二 陸 師 三 浦 一 夫
進水に間もなき船や夏の月

京都市 愛 發 紅 芽
鳶舞ふや夕立雲のむく／＼と

飯田市 古 川 哲 洲
新樹の香流れて清し五十鈴川

北海道 清 水 保 子
わらべらの遊びに清水にこりたつ

飯田市 宮 澤 榮 子

深川 清 水 貞 水

涼しさは一雨過ぎし池の月

東京市 錦 木 白 舟

雨の夜の泣く兒が蚊帳を出て来た

滋賀縣 重 野 ふ み 子

紫陽花のがくりと垂れて日暮れけり

投稿規定

官製はがき一回二句以内

とし「淨土」編輯部併環

係あてに送ること。

係あてに送ること。

係あてに送ること。

或る病兵の手紙

編輯部

第四信

先生、過日は大變愚問を差上げましてお許し下さい。いかに高熱のためとは云ひながらとりとめの

感ずるやうです。後で考へれば考へる程、ただ申し譯なく、恐縮の致りに存じ、甚だ勝手ながらあの一文はお取消し願ひたく存じてゐます。

ない私の愚痴を申し上げ、お忙し

こゝ四五日来、熱が下り氣持も大變落ちついて來ました。只今考へてみますと、あの時に軍醫殿か

前號までのあらすぢ

陸軍病院に一意療養を續けてゐた酒井廣美

氏が、病勢が亢進し絶望であると知つて日夜苦惱を續けた。その時折よくも「慰問淨土」として配られた本誌を手にして一縷の光明を發見し、早速に中村師に相談したところ、同師から懇切な回答に接し、とに角お念佛を唱へるまでになつた。そして刻々に迫り來る肉體上の苦痛と闘ひ絶え絶えになる呼吸の下から一心に唱名してみたが、容易にお念佛を心底から申す境地には達せられず、口にはお念佛を唱へながら頭の中は雜念で一杯であつた。

らお前は駄目であると云はれた氣落ちから、急に熱がのぼり、従つて呼吸困難、貧血、食欲不振等と次々と病勢が悪化の一途をたどり、そのために私はわけもなくただすぐにも死ぬものと決めてしまひ、考へてなどはゐられないと云ふ焦りをそのまゝに、思ひつくまゝ書きたて、獨りで大騒ぎしたのがほんとにお恥しうござります。

を達觀せねばならぬものだし、さうなりたいたいものだと思つてゐます。ただし私のやうな拙ない者に、そんな心境が得られるかどうかは判りませんが、若し死ぬまでに得られませんでしたら、これまた止むを得ないこととせう。何れにしても死は來るので、時が來れば死ぬのです。

先日、鳴鳥敏先生の「清澤先生臨末の御教訓」、「肉體の彼岸」などを拜見いたし、「死」と云ふものを諦める氣持になつて來ました。尤も諦めるのでは、また一驚怖が頭を上げて來ることがありますから、ほんとは修養によつて生死

私一人がこゝで急に死んだとて世間にとつては小鳥が一羽死んだ程にも思はぬでせうに、自分一人で苦悶に苦悶を重ね、一ヶ月の間と云ふもの、それこそ寝る間もなぐ騒いだのがおかしくなります。世間にとつては小鳥一羽にも及ば

ぬ私の死であるからこそ私自身には餘けい大問題でもあつたのでせうけれど、どの道大したことはないうやうに思はれて來ました。

これからはじつくり落ついて修養致したいと存じます。この次ぎにはもう少し分つた心境をお傳へ出來れば、仕合せと存じます。

五月八日
酒井 廣美
中村上人様

第五 信

先便のお葉書二十三日に拜讀いたしました。その翌日の二十四日に當療養所に參りました。こゝでは來たばかりですから語るに友なく、ボンヤリ空を眺めてゐるところへ、二十五日付の御書面到着いたし、拜讀いたしました。何んと有難いお言葉、私の如き無智な者

の恩顧にも一々御返事を下さる御厚情に接し、また殊に私の氣持を引立てるやうにして下さるお氣持には何んと御禮を申し上げてよいやら、ただ感謝の外はありません。

先生、死と云ひ哀別と云ひ、とと云ひ、とても逃れることは出來ぬと諦めてはゐますものゝ、私如き頭で諦めるのでは、生死と云ふ

大問題が片付くものではありません。いくらあせつても駄目です。自分の苦が苦にならぬやうに

ただ頭の中で諦めてみても結局苦しいことに大した變りはありません。先日、家内が子供を連れて面會

に來ました。六才になる二女が家内の鞆を持ち、二才の双生兒の二女と三女が、家内の兩手にぶらさ

がつてちよこちよこ歩いて來ました。そして私と家内とが要談してゐる間にも、もう病室には居らないで、窓の下の砂利の上にすわりこみ、頭の上から砂をかぶつて嬉々として遊び戯れてゐる様などを見つると、わけもなく目頭が熱くなつて來てたまらぬ思ひがいたします。言葉がづまつて要談も絶え勝ちでした。



SHIRO

先生から一番最初に教へて頂いた通り、初めの内は如來に南無してゆくやう努め、これによつて氣持が落ちつくやうに思ひました。しかし段々と日がたつにつれ、何うも物足らぬやうになり、暫く中絶のかたちでしたが、その内にまた如來にすがるやうになりました。最初に頂いたお手紙を今になほつくづく讀み返してゐます。

陸軍病院は病氣を癒すところでは

療養所は病人を精神的に鍛へる所です。従つて當療養所にも宗教の講演會がしばしばあり、圖書館には宗教に關する良書が随分ありま

すので、先づ讀書に事欠くことはありません。尙こゝで心の友が一人出来ました。彼は年こそ私より若い信仰では大先輩です。勿論彼は佛教信者ですが、この先輩も悩みを御相談したいと申してをり

ました。

いつぞや先生に申し上げました「死の宣告」と申すのも、實は軍醫殿が心配のあまり「こりやいかんなあ」と云つたのを、私がもう死ぬに違ひない、今夜か知ら明日か知らと驚きその結果熱がのぼつて貧血し、頭が混亂しておい／＼泣いてゐたと云ふわけです。だから落着いてみれば平熱に下るのも道理です。

る時が何時であるかは分らぬ、いくら醫者がなほしてやらうとしても死の力には勝てないが、それと同様にお前がいくら死なうとしても天命が盡きるまでは生きて居らねばならない。だから生死と云ふことを忘れて最善をつくすやうに……」

第六信

先生、御著一枚起請文講話を拜讀いたしました。そしてたゞいま

「馬鹿！ 何處をみてゐる。及び腰で。自分の足元はどうした！」

と思ひきり叱りとばされた感じ

です。人に聞いたり本を讀んだりして、佛教の究極は何處だらうと

か、彼岸は何處だとかばかりが氣になつて、肝心の歩一步と進む念

佛を忘れてゐました。見えぬ先ばかりを見たいものと及び腰になつ

て春をのぼし、首まで延ばして早く見たい、何處だとフラフラして

はれないが、しかし生命力の盡き

目だからもとの身體になるとは思

らぬを知るもので、君の兩肺は駄

「現代の醫學は肉體をみて癒る瘡

は温いお言葉をかけられ

陸軍病院を退院する時、軍醫殿

私の身體は暖い國家の施設に養はれ、私の家族は軍事扶助を受けて心配はありません。教へを授けて下さる温い先生あり、遇ひ難い佛教には遇つてゐるし、心の友は悩みを別けて呉れると云ふし私程に恵まれた幸運者はない筈なのに、何うして泣き叫んだのでせう。これからは一生懸命努めませう。中途で念佛にあきが來たのは

求道途上の一頓座、道草であらうと友も云つてくれます。早く方向轉換をして、死ぬ時には屹度心から喜んで大往生するやう努めませう。

「死の宣告」と申すのも、實は軍醫殿が心配のあまり「こりやいかんなあ」と云つたのを、私がもう死ぬに違ひない、今夜か知ら明日か知らと驚きその結果熱がのぼつて貧血し、頭が混亂しておい／＼泣いてゐたと云ふわけです。だから落着いてみれば平熱に下るのも道理です。

五月二十八日
傷痍軍人療養所 酒井 廣美
中村先生
追伸
四月三十日の拙文に對する先生の御書面は残念ながら分院との行き違ひから拜受出来ませんでした。松は縁に、草は青々と萌え、四方は山で取りかこまれてゐます。入梅が終れば夏知らず

ゐるところと、一枚起請文の竹刀

されました。

法然上人が生死をまかされた有難

ませんが、餘り永いとまたあぶな

うお願ひいたします。
五月三十日朝

で思ひきり兩足を拂はれました。

そして四つんばひになつたところ

いから一週間ときめて、絶対念佛

何物かを得ずば止まずの氣魄を

を、今度は前から「貴様は何んと

いお念佛！なんで私がとやかく迷

生活に入ることに致します。

持つて

云ふ己惚の強い奴だ。歩きもせん

ふ、餘地がありません。

讀書も止めます、話もしません

面會も絶つて本當にやつてみま

酒井 廣美

で入信だ、心

況が何だかだ

とに角一枚起請文を読んで、こ

中村先生

御机下

と口ばからバ

クバクさせて

これはほんとに生やさしいことでは

(つゞく)

(大羽四郎畫)

ゐる」とたゞ

なつてすがつても決

して悔ひのないもの

飲めば益々

元氣旺盛

かれました。

只今までの

と云ふことが分りました。

無(んにく粉末)コナワサビ

臭固形(んにく)そてつ粉末

ところはお念

佛にあきが來

これから先一週間か

又は三週間かの後にな

つて、その時の心流を

たと云ふのか

信に氣をとら

お便りしたいと存じま

す。そして直すべきと

ころを是非とも御指示

れたと申すの

か、よくは分

願ひたいと思ひます。

神 谷 昌 孝

電話二八六三番

りませんが、

とに角今になつて初めてお念佛の

本日から一週間(その上で二週

間になるか、三週間になるか分り

ません

大事なこと

間になるか、三週間になるか分り

ません

静岡市上谷町

振替東京一四六五一一番

とに角今になつて初めてお念佛の

本日から一週間(その上で二週

間になるか、三週間になるか分り

静岡市上谷町

振替東京一四六五一一番

大事なこと

間になるか、三週間になるか分り

ません

神 谷 昌 孝

電話二八六三番

とに角今になつて初めてお念佛の

本日から一週間(その上で二週

間になるか、三週間になるか分り

静岡市上谷町

振替東京一四六五一一番

大事なこと

間になるか、三週間になるか分り

ません

神 谷 昌 孝

電話二八六三番

とに角今になつて初めてお念佛の

本日から一週間(その上で二週

間になるか、三週間になるか分り

静岡市上谷町

振替東京一四六五一一番

大事なこと

間になるか、三週間になるか分り

ません

神 谷 昌 孝

電話二八六三番

とに角今になつて初めてお念佛の

本日から一週間(その上で二週

間になるか、三週間になるか分り

静岡市上谷町

振替東京一四六五一一番



飲めば益々
元氣旺盛
無(んにく粉末)コナワサビ
臭固形(んにく)そてつ粉末
小供の疳蟲によくさく
孫太郎蟲あります

特約店大募集中

静岡市上谷町

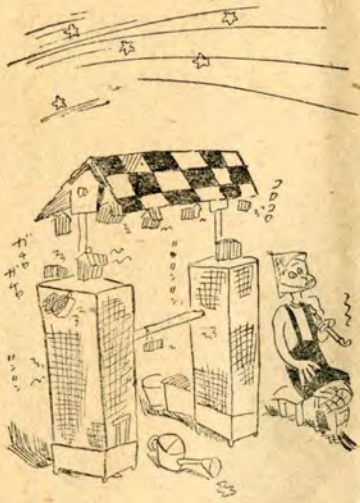
神 谷 昌 孝

電話二八六三番
振替東京一四六五一一番

まんが 初秋きのぞく

漫画協団

父ちゃんは
物まね師 をぎ原賢次
「坊、そんなものは
買はんでもいよ、
聞きたければ父さん
がやつてやるソラ……」
「ツマンナイヤ」



読書の 候と相成候

川口久作

懐の秋

山崎善一

「君五圓こまかいの
あるかい」
「あひにく三圓しかない
んでネ」

「チャ三圓でいゝから
一寸貸してくれ」



ケイブルカー

「君イもしこの綱が切れ
らどうするんだらう……」
「安心したまへ
勿論料金は
拂戻し」

をぎ原賢次



國策の秋 川口久

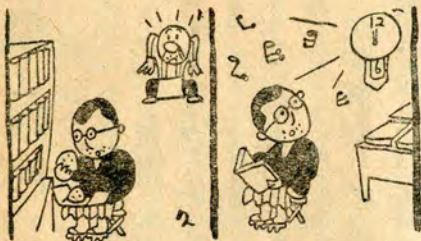
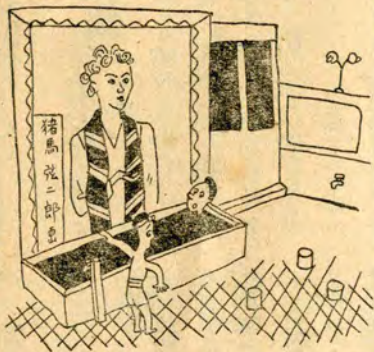
「きんし下さい」
 「品切です」
 「ひかり下さい」
 「品切です」
 「さくらは……」
 「品切です」
 「ちやちや豆サイケンを……」
 「はいよ」



落選

山崎善一

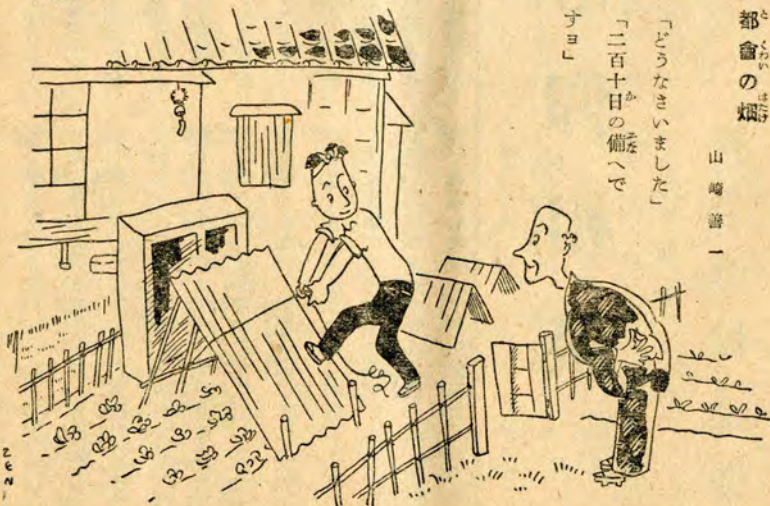
「ホ、ウ錢湯に
 油繪とは勿體な
 いですな、第一
 これなら展覽會
 へ出してもひけ
 をとらないネ」
 「イエ展覽會で
 ひけを取つたの
 で、ここへ持つ
 て來ました」



都會の烟

山崎善一

「どうなさいました」
 「二百十日の備へで
 すヨ」





眞宗と淨土宗、極樂と回向

(問)

淨土宗の信者のことをなぜ「の

らくら淨土」と云ふのです

か。なぜ淨土宗の信者はお念佛に熱心でないのです

か。また眞宗の信者をなぜ

「一概者」と云ふのですか。何うしてあんなに

お念佛に熱心なのでせうか。

また現今のお説教のお導きは昔とはちがつて

居るやうに思ひますが、何う云ふ譯でせうか。

また今のことでなく死亡してから有り難い

お經を申して回向すれば、亡くなつた靈が極樂に行けるのでせうか。

また生きて居るうちにお念佛を申せば極樂を作り、

極樂に行きたくない人は地獄を作る

と云ふのは何う云ふ譯のものです

か。中村先生様にお聞きいたします。

(答)

由來淨土宗信者は眞宗信者の方々よりも熱心さに於いて足りない

ものがあるやうです。これは畢竟淨土宗の布教方法が從來下手であり教化力に手ぬるさがあつたからではあるまいかと想像されます。

と云ふのは徳川時代に於て、徳川幕府から特別の庇護があつたから、生活上にも顧慮がい

らず、その永い心のゆとりが自然にさうさせたからでせう。是れに反して眞宗ではむしろ幕府からの壓迫を受け

て居りましたから、勢ひ教化に力を注ぎ實力を養成することに努力したので、信徒の數も増加

し愛宗の氣持も強く信仰的結束も出来たので

はありますまいか。私

(青森・平館・丸尾久二)

信 仰 相 談

質問 歡迎

擔當 中村 辨康

其の地方では昔は「淨土自墮落」と云ふことを云つて居りました。然しながら之は前述の通り教化が足りなかつたからです。その證據には教化力の強い地方では、淨土宗の信者も中々熱心で、うっかりした御説教は出来ない

と云ふことです。關西から九州へかけては篤信の方が多いやうです。大目比などでは全村

皆な淨土宗で小學校の兒童に至るまで熱心に

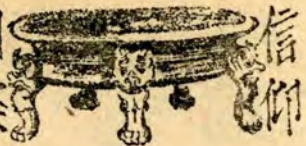
お念佛となへ、僧侶と道にすれちがつても合掌し十念すると云ふことです。

次に眞宗の信者を「一概者」と云ふことは

私共の方ではきゝません。恐らく一般的な言葉ではないでせう。然し意味は一向念佛の信

にのみ熱意を持つて居て、他の雜信仰には心を寄せないと云ふ善意的な言葉かと存じます。信仰としてはほんとにそれではなくてはならぬと思ひます。

次に説教の内容が昔とちがふと云ふことは、内容を承らないとより分りませんが、何とも御返事のしようもありませんが、大體に就いて私の所見を申し上げますと、根本信條に於いては違ふ筈はありませんけれど、その表現のしかたとか、言葉の使ひ方とか云ふものは時代々に依つて異つて行くのではないかと存じます。社會風潮も藤原時代に於ては現世的であつたが、源平争亂のあとを受けつてからは、未來主義になり、明治になつて初めて現在から未來永遠にと云ふことになつて參りましたから、宗教の表現もまたそれにつれて居ると思ひます。次に回向のことですが、



相談

信仰

これは今までに度々此の欄に出たことでありますから、それらを御覽願ひたいと存じます。また「淨土宗讀本」にも出て居りますからそれを御覽下さいまし。若し御手許になければ誰か御所持の方のを借りて御覽下さいまし。但し信仰上のことを功利的な意味にお考へにならぬやうおすゝめ致します。獨り回向の問題には限りません。それでないとあなた御自身の御信仰も何時までも變な處にこだはつて伸びて行きません。それよりも自分を何うすればよいかと先決問題ですから、御自身の信仰を如何に洗滌し如何に進展せしむべきか、そこに重點を置いて下さいまし。

次に信仰は死んでからは意識の上にならぬのですから、無論生きて居るうちに念佛の信に入るのが本當だと思ひます。また極樂を作り地獄を作ると云ふ御話しは、何う云ふところから出たか存じませんが、誰かさう云つた人もあつたのでせうか。業力所感と云ふやうな話から誤り傳へられたのかも知れませんが、極樂淨土は阿彌陀佛の世界であつて、私達を作ると云ふやうな淺蕪なものではありませんし、また私達の申す念佛が淨土を作ると云ふ譯には參りません。有爲有作の氣持でなく、素直に一枚起請文の文句のまゝに「疑ひなく往生するぞと思ひ取りて」ひたすらに本願を信じ、純な氣持で念佛する人は淨土の往生が可能なのです。之れを單直仰信と云ひ「往生第一の機」として居ますが、今の教育を受けた人には容易にさうなり切れませんで、多少お話しをきいたりして心に納得させなくてはなりません。それを「義解念佛往生の機」と申し、又は「解信」とも云ひます。然しそれとてもホンの些さかなことしか判らないのですから、結局は「仰信」になるのですが、念佛して極樂に行くと言ふのは、既に作られてある麻の畑の中へ蓆を移し植えるやうなもので、淨土に行つて本當の人間になるのです。私共が念佛して淨土を作るのではなく、如來様の大願業力が私達を引きつづつて淨土へつれて行くのです。その邊の誤解のないやうに願ひます。また地獄に行くことは淨土



教義の信仰の上から云へば、親のしおき見たやうなもので、改心させる爲めのこらいめなので、之れまた「作る」と云ふやうに見ない方がよろしいのです。

無義無爲と云ふ意味

聖道門流に云へば業力に依つての所感であるとして、或は「作る」と云ふかも知れませんが、淨土門では、さうお考へにならないで、親のせつかんのやうなものと思つて頂きたうございます。

(問)

御多用中恐入りますが、故波邊海旭先生の歎異鈔講話の中に「無義無爲」と言ふ言葉が出て居りますが、その涵み方と意味とをお示し下さるやうお願ひ致します。眞宗に於ては「無義爲義」といふ熟語が大體意味が分りましたけれども、兩者を比較して教へて下さると結構に思ひます。

(静岡市・西千代田・佐藤恭輔)

(答) 渡邊先生の歎異鈔講話があることを知りませんでしたが一、度拜見したいものです。御覽ねの「無義無爲」と云

ふのは熟語ではないやうに存じます。唯だ説明上の言葉ではないでせうか。また「無義爲義」と云ふのも熟語ではありません。法然上人の法語に「念佛は様なきをやうとす」と云ふのがありますが、それと同じやうな意味で「義なきを義とす」と云はれたのであつて、佛敎術語の「無義」又は「無義語」と云ふ用ひ方とは違ふと思ひます。

けれども、恐らく佛敎術語上の「無爲」即ち涅槃と云ふやうな意味での用語ではなからうと存じます。想像ですから或は當らぬかとも恐れますが、それは「義なく爲作なき」ことを云はれたのではないでせうか。佛敎術語としての「無爲」には三無爲又は九無爲等の別があります。例へば擇滅無爲、非擇滅無爲、無爲虚空と云ふやうなものが「無義無爲」と云ふ無爲は見當りません。無論「無爲」は「爲作なきこと」を表示した涅槃的内容の説明語でもあります。大毘婆沙論第七十六に「若し法にして生なく滅なく因なく果なく無爲の相を得たる是れ無爲の義なり」とか、或は俱舍論第六の「無事法とは云何。謂く、諸の無爲法なり」とかありますやうに、説明としての用法もあり、また内容的にも無爲、無事、無業と云ふ意を持ち得るから「無義、無爲」と並べることが決して差支へないと思ひます。ですが一度その前後の文章を御明示下さらないとハッキリした御答へは出来ないと思ひますので、御本を拜借して下さる

か、又はその文章の一節をお見せ下さいまし。

地球の壽命と佛力

(問)

「佛心を以て非科學的科學の實行」一般の生物また人間に壽命あり、此の世界地球にも一定の壽命ありとせば、地球の壽命が盡きる時、み心即ち佛の心も盡きはつきか否か。若し其後に及んでも佛心があるとすれば如何なる動きと働きとを爲すものや。現世に於て我等非科學的科學を以て悲惨な争奪心を救ふべき方法が見出せなければならぬと思はれます。再三のお尋ねで甚だ恐縮ですが誌上にてお教へを願ひます。

(答)

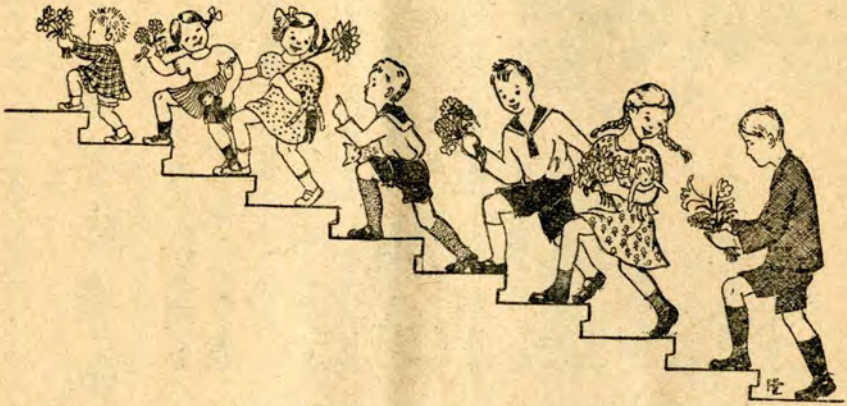
(栃木・鳥山・大輪清)
私には御賀ねの中の「非科學的科學」と云ふことが如

何なるものなのか判りませんので、そのことに就いてのお答へは出来ませんが、初の方の問題即ち「地球が終つた時には佛の救ひの對象たる人間も無くなるから佛の力も恐らくは働けなくなるのではないか」と云ふ問題に就いてだけお答へ致します。

人類は私達の現に經驗して居る範圍に於いては此の地球上だけにしか認識されませんが、佛敎の「不増不減」の理から申せば「成住異滅」三出来ること、暫く止まること、變化すること、無くなること」の繰返しはあつても、それは要するに暫定的な繰返しであつて決して消滅することはないと見て居ります。私達の太陽は唯だ一個の太陽であつて此の一個の太陽を取り巻く地球や水星や火星や土星や乃至天王星などは、その太陽から分れた一むれの遊星群に過ぎないのであり、他の澤山

な恆星(即ち他の無數の太陽)の一つ一つも亦若干の遊星を引きつけて、一つの太陽系を形作つて居るであらうことが推定されて居ります。若し他の太陽系の中の一遊星が私達の住んで居る地球とほぼ似た條件を持つて居るならばやはり私達に似た生物がその遊星に生息して居るであらうことも推定が出来ます。また夜空に輝くあの澤山な星の群は一つの「天の川」を形成して居ますが、此の私達の眼に見える「天の川」以外にもまだ他の「天の川」があるのでないかとの説もある位で、大宇宙と云ふものは到底私達の頭では想像が出来ない廣大なものです。此の想像も及ばない廣大無邊の大宇宙の中には私達が住んで居る地球と同じ條件の遊星が何の位あるでありませうか。それも、唯だ想像だけで「あり得る」と云ふ推定は出来ても、經驗範圍以外のことですから、本當のことは判らないのです。しかもその廣大無邊大宇宙に比較すると、私達の太陽系は一つの粟粒くらゐの小さなものですが、(四八頁へ續く)





童 話
 勇 敢 な ビ ボ

小 林 一

皆 さん !

きやうだい同志が仲よくするつて、そんな
 にむづかしいことなのでせうかしら。兄さん

こゝに子供がゐます。お父さんが寫眞をと
 らうとしてみんなが家の前に集つたところ
 ですから、一人一人ゆつくり見ることが出来ま
 す。

がいちめたと云つて妹がお母さんのところ
 へ泣きながらかけて行く。お母さんが中に入
 つて、小さい頭をなでながらくりかへしくり
 かへし云ひますね。「お互ひにがまんし合つ
 て、仲よくしなければ」と。さう云はれる
 と、ほんとうは仲がよいのですから少しばか
 りはづかしくなるものです。でも、かう云ふ
 愛は、それを示して、實行しなければいけな
 いのです。それは私たちのところばかりでな
 く、世界中どこへ行つてもさうです。

一番小さい子から始めませう。それは末つ
 子のコルネリユースです。彼は四つです。他
 のきやうだいは年かさの十六になつたヨスト
 まで、二つづゝ違つてゐます。コルネリユ
 スは今まで末つ子だつたのですが、やつと自
 分が可愛がられるばかりでなく可愛がりもし
 なければならぬと云ふことをならつたところ
 です。コルネリユースと一緒に幼稚園に行
 つてゐるアンニーは頭の兩側におさげをゆつ
 て綺麗なリボンをつけてゐるのですぐ解りま



す。彼女はお人形に晩ご飯をブツディングと
いちごのチャムがつくよ、と話してあま
す。その次はおかつぱにしたコリーです。コ
リーはもう學校に行つてみますが、算術が一
番苦手です。ヨストに自轉車をつれて行つて
もらふのがとても好きです。その次がちよれ
毛のビポーです。ビポーについては多くを云
ひますまい。彼はこのお話の主人公です。ル

ードキツヒは小さいコルネリユースと特別の
仲よしです。今もコルネリユースのうしろに
ちやんと腰かけてゐるでしよ。ルードキツヒ
のすることをこの弟は何んでも真似るので
す。無論ルードキツヒは立派な子供ですと
も、髪の毛の多いマリーはいつも氣嫌がよく
て歌つたり、はねたりしてあます。おしまひ
がヨストです。彼はもう立派な若者で、きや
うだいたちはこ
んなに賢い、強
い、勇氣のある
兄さんを持つて
ゐるのを自慢し
てゐるのです。

これで子供た
ちの紹介は終り
ました。みなさ
んはすぐこの七
人とお友達にな
つて、愉快な時
間を過すことが

出來ますよ。

お父さんの思ひつき

お母さんは何時でも、とても澤山の仕事を
しなければならぬのです。一日中たえ間な
くお仕事があります。

子供達にご飯を食べさせなければならぬ
し、汚れたお顔や手を洗つてやらねばならぬ
し、足袋や靴下を繕つてやらねばならぬ
し：：それに小さい子供達にはご本を讀んで
やらねばならぬのに、大きい方の子供達は
遊びたがるし：：全く、お母さんは獨りで澤
山のことをしなければならぬのです。

まして、この話に出る七人の騒がしい、元
氣な、腕白子供のお母さんの様な方は、それ
は、大變です。ヨストの靴下を直してやつ
たばかりなのに、ルードキツヒが轉んど着物
をやぶいてしまふ、コルネリユースがやつと
寝ついたと思ふと、ビポーが泣きます。

或る晩、ヨスト、マリー、ルードキツヒ、
ビポー、コリー、アンニー、そしてコルネリ

ユースの七人兄弟のお母さんは、お父さんがお家へ歸つて来た時、頭を抱えながら、ため息をついてゐました。

「どうしたんだね？ ちつとも元気がないぢやないか。」とお父さんが仰言つた。

お母さんはお父さんを見て、

「とても疲れて仕舞つて、背中が痛くて：：と云ひました。

お父さんは、何か考へてゐる様な風でした
が、

「どうも、この儘ではいかんよ。お前は家の腕白共に澤山過ぎる程仕事をさせられてしまふのだから、と云つて」お父さんもため息をなすつて、「子守をおく程の餘裕もなし：：」

「ビローには新しいマントがいらすし、ヨストは洋服の肘を破いてしまつたのです」とお母さん「今晚中にそれを繕つて仕舞はなければなりません。」

お父さんはお母さんを優しくいたはつて、「今日は仕事はお止めなさい。ヨストには明

日はよそ行きの着物を着せて置きなさい、私は今考へてゐることがあつてね。」

と言ひました。

「何ですの、どんな事をお考へになつたの？」

「今日、私は他處の家庭のことを聞いて、この家もそう云ふ風にやればやれないこともあるまいと思ふのだ。お前は朝登子供を學校や幼稚園へ連れて行つたり、着物を着せたり、脱したり食事の世話をしたり、食べさせたり、食事する時間もありはしない。私は、時々考へるのだが、私たちは兎に角何不自由なくしてゐるのに、お前は自分のことはなになつ出来はしない、と」

お母さんは笑ひました。

「母親となれば誰でもみんなかうですわ」

「然し、それは良い事ではないし、第一お前の身體が續かない。明日の朝からこの家のやり方をすつかり變へてしまふのだよ！ まあ聞いておくれ、三人の小さい子供は大きな子供に特別世話をして貰ふのだ。大きい子供は小さい子を學校へ連れて行つて、又連れて歸る

のだ、着物を着せてやつて、寢床へ連れて行く、ご飯を食べさせてやつて、遊んでやる、簡単に云へば、お前がやつてゐた一切の面倒を子供同志に見させるのだ。

私は今迄、こんな事に全く気がつかなくつた。かう云ふ風にやつて行くと、お前は休んだり、本を讀んだり、ピアノを弾いたりする暇が出来ると云ふものだ。そして子供たちは自分のすべきことが解るのだよ」

お母さんは一寸考へてゐましたが「本當にそんなことが出来るでせうか」と云ひました。「子供達が皆んなで働いて、お互に助けあつたら、この考へはとても立派なものになると思ひますわ」

「勿論だよ。初めのうちは慣れないから間違つくだらうが、七人とも仲が良いのだから、すぐ慣れてしまふよ。大きい子が小さい子をいたわつてやれば、同時に、今まで考へもしなかつた様なことが澤山教はることになるのだ」

お母さんは少しのり氣になりました。

「さうすると、ヨストにはコリーの世話をさせるのですね、あれはコリーを學校まで連れて行つてやれますよ。ほんの一寸の廻り道ですから」

「それも悪くないな。足は達者だからな。それから、子供達は三十分早く起きて、自分で床を上げる。大きい子は小さい子の手傳つてやること」

「さうですわ。きつとうまく行きます。」とお母さん「とても楽しみですわ、それからと、：：：マリーにはアンニーの世話をさせませう。ルードキツヒはコルネリユースちやんの世話をさせて……」

「うむそれは良い組合せだ。ルードキツヒとマリーは小さいのを二人それぞれ幼稚園へ連れて

行ける。まかせておいても大丈夫だ、道も人通りが少いし。私達が子供達をそんなにも信

頼してゐることを知つたら、子供たちはきつと喜ぶよ」

「ビボーだけがとり残されて仕舞ひました



産

ね。ふくれるでせうね」

「さうだね」とお父さんは考へて、

「では毎朝あれには、私達にお茶を入れさせることにしよう。なにか、お前、ビボーにさせてやらないと、自分だけ除け者にされたと思ふからな。自分の世話する子供がゐないと承知しないかも知れないな」とお父さんは笑つて云ひました。

「え、それにあれは元氣ものですから。でも……」とお母さんはお父さんの手を撫でながら「ビボーにも、もう少したてば、世話をする子供が出来ますわ。」

「うむ、さうだつたな」とお父さんは立上りながら「これで私もさつぱりした。おやもう一時間ばかり話し込んでしまつた。子供達には何時話してやるかな」と云ひました。

「明日の朝飯の前が良いでせう」

「よしあしたの朝は、私が三十分ばかり早く起きて云つてやらう。『起きろよ、さあ、今朝は七時半から八時迄家族會議を開くのだ。お母さんは疲れてゐる。お前たちはきちんとやつて行くんだぞ』と。さうすれば、お前もうちやう／＼した事をやらずに済むのだ」

新らしい出發

そこで、翌朝八時には子供達は、物待ち顔でテーブルの廻りに集りました。お父さんはもつともらしい顔付をしています。

お母さんは、あらためて皆さんは本當に仲良しなのかどうかを尋ねるのでした。

それからお父さんが、一つのお話を始めました。それはある澤山の子供たちを持つたお母さんのお話です。そのお母さんは、そんな澤山の子供を一人で世話したため病氣になつてしまふと云ふ悲しいお話でした。

子供たちは皆んなとても心配さうな顔つきをしました。そのお話のお母さんと云ふのは、自分達のお母さんのことではないかしら？ でもお母さんは皆んなの真中に坐つて満足さうに笑つてゐます。

お父さんはお話のあとでかう付け加へるのでした。

「まあ、それは一つのたとへ話だが、うちのお母さんだつてそういつまで獨りで何もかも

もやると云ふわけには行かなくなるよ。着物を着せたり脱したり、學校へ連れて行つたり、連れて歸つて來たり、御飯の仕度をした

り、食べさせたり、何もかもやらなければならぬ。そんな澤山のことをすつかりやるなんて、うちのお母さんはまるで手品使の様なだ。だが、もうそんな事は止めなければならぬ。さあ今日からお前たちの中の大きい者は、小さい方の子供達の一人を自分の子にして、その世話をやいてやることにしようぢや

ないか。そしてその子供のために、自分の出来るだけのことは全部してやる。それでもお母さんはまだすることが澤山残つてゐる。」

暫くの間、皆んなは黙りこんでしまひました。家中がこんなに静かになつたなんてとてもめづらしいことです。

するとルードキツヒが口を開きました。「僕はコルネリユースの世話をするよ」

「うん、よし。ではさうきめやう。では次は誰かね」とお父さんは一番年上のヨストを見ました。ヨストはとても眞面目な顔つきで考

へてゐます。彼にはお母さんがどんなに手助けをほしがつてゐるのか、一番よく分つてゐたのです。

然し、中學校で色々難かしいことをやつてゐる上に子供の世話をするのは仲々大変なことだ、と云ふ事にも氣が付いてゐるのです。それに自分の學校はコリーの學校とはまるで街の反對の方向にあるのです。

學校の友達が彼のことを、笑はないだらうか。でも、彼は、妹を自分の自轉車にのせて早く學校へ連れて行く事が出来る。どんな子供でも八ツにもなれば、ひとりで學校に行く事が出来るのに、コリーは少しほんやり者だ。それでお母さんはコリーの通る大通りのことを心配してゐる。無理もない。それに自分が教へれば、コリーの算術の宿題だつて良く出来るのだし。——そりや昨日のやうにど

なりつけることだつてあるけれども、「どうだね」とお父さんはなほも追急します。ヨストは顔を赤くして

「僕はコリーにします」と云ひました。



「アンニーよりもましですよ」
 「よし、」お父さんは云つて、ことのほか親しげにうなづきました。と云ふのは、長男にとつて、それが仲々大變な仕事だと云ふことはお父さんも解つてみましたから。

「感心だな。お前たちがそうしてくれればお母さんも大よろこびだ」と云つて、お父さんは一座をぐるりと見廻して、
 「さうすると、こんどはマリーちゃん、アンニーのお母さん代りになると云ふ願番だな。するとビボーが「僕は？」と尋ねました。
 お父さんとお母さんは顔を見合せました。お父さんとお母さんはまだ子供達の知らない大事件をこゝで話してしまはなければならぬいでせうか。

もつとも年かさのヨストだけに、二三日前に一寸話して置いたのです。お母さんは思ひ切つて云ひました。

「ビボーや、お前にはね、まだ世話する子供はないのよ。でも、それは長いことではないの。もうぢぎ、物置にしまつてあるばら色の揃籠を又引き出して、きれいに

おそうじしておかなければならないのよ。そしていつかあなた方が學校から歸つて來ると、可愛い小さな、新しい赤ちゃんがその中に入つてゐるのよ」

皆んなが一つせいに歡聲をあげました。
 「その子が僕でしよ？ そうでしよ、お母さん？」とビボーは興奮して眞赤になつて叫びました。

お母さんは笑つて

「赤ちゃんが、妹なのか、弟なのかお母さんには解りません。でもその子が少し大きくなつたらビボーの子になるのよ」
 と云ひました。お父さんも満足さうにつけ加へました。

「でもね、ビボー、お前にはまだ子供がない中は特別にする仕事があるのだよ。毎朝お父さんがお茶を沸すのを手傳つて、それをお盆にのせてお母さんのところへ持つて行つてあげるのだよ、お母さんがゆつくりそれを飲むるやうにね」

「えい、いゝですとも。とてもうまいお茶を入

れてあげますよ、お母さん」
とビポーは元氣よく答へました。

「さて、それでは誰がお膳の仕度をするかね」

「わたしよ、わたしよ！」

と三人の聲が一つべんに叫びました。

「お父さん、今からすぐ始めますよ。」

「そりや結構だ」とお父さんは、萬事がすつかりうまきはこんだので大變満足して云ひました。

「さ、これからヨストはコリー、マリーちやんはコンニーを、ルードキツヒはコルネリユースの世話をしてやる。さうすればお母さんもゆつくりと澤山ご飯を食べることが出来る」と云ふものだよ。それから大きい子は自分の子を學校へ連れて行つて、歸りは一緒に歸つて来る。そして自分は小さい子の保護者だと云ふことをはつきりさせるのだ」

「僕はお皿やお碗をお勝手へ運びますよ」とビポーが申出ました。

「感心々々！」とお父さんはビポーの頭をなでました。「お前に子供のない間は、出来るだ

けお母さんの手助けになることをするのであるよ」

「私は今朝ゆつくりして、久しぶりでご本を讀むことも出来ますわ」と、お母さんは笑ひながら云ひました。

ヨストはお母さんを見つめておもしろいのでした。友達は小さな女の子を自轉車に乗せて行くのを見ておもしろいからかふかもしれないが、そんな奴らにはこつちで笑つてやらう！

「ねえ、コリー、僕の自轉車のうしろへ乗つてゆくのだよ。」と彼は小さい妹に云ひました。「算術の宿題はすつかり出来たのかい？」

妹はうなづいて云ひました。

「ええ、お母さんがおしへてくれたの」

「それぢや、これからは僕が教へてあげるよ」とヨストは云ひました。(つづく)

米倉隆從畫

(四一頁より續く) それでも私達には中々想像することも出来ない程の廣大な世界です。また假りに大宇宙の無數の恆星の一つ一つを取り巻く無數の諸遊星の凡てが、人類の住むに堪へない條件になつてしまつて(そんなことは考へられませんが)一人も人類らしい人類や生物らしい生物が消え失せてしまつたとしても、星雲と云ふまだ恆星を形作らないものも無數にあるから、それが恆星を固成し、その恆星から飛び出した遊星が出来、そして若干の年數さへ過ぎれば人類の住むに足る條件がそれに具備されるでせうから、やがてまた生物が出来、それが進化して人間のやうなものも出来て来る譯であります。若干の中斷期が假りにあると致しまして、それは無量劫の壽命の中の一小部分の變化であつて、大局から見れば一瞬の休息に過ぎません。だから貴君のやうな御心配は更々いらないことと存じます。従つて佛力は何うにもなりません。恐らく働きづめに働いて居られることでせう。御安心願ひます。

山本幹夫博士著

法然佛教とわが國體思想

▽…… 淨土宗 待望の書成る…… △

淨土宗務所教學部長

江藤 澁 英

東亞新秩序の建設を目指して時局は一層の緊迫を示してゐる。しかし東亞の新秩序建設と云ひ、東亞大生活圏の確保と云ひ、そうした皇國の課題は單に今に始つた政治的問題であるとのみ考へてはならない。皇國の文教は古來そうした東亞大生活圏の下に展開し來つたもので、たゞ大陸諸邦との文化交流と云ふやうなことでは云ひ盡し得ぬ程根強い結合があるのである。この根深い結合にまで反省するのなれば、東亞大生活圏の確立なる現下皇國の大課題も、眞に理解することが出来

ず、また眞に解決することも得ぬは云ふ迄もない。而してわが皇國の文教は古くよりの大精神に徹して基調を築き來つてゐるが、かゝる基調の最高峰の一として、山本博士はわが宗祖法然上人の宗教觀を發見し、該博なる蘊蓄を傾けて論盡せるもの即ち本書である。著者山本博士は廣島文理大學の新進教授として學徳の令名が高い。しかも博士は夙に淨土の篤信者であり、念佛の實行者であつて、先に「辨榮聖者の人格と宗教」なる好著を公にしておられる。私は昨夏六月、廣島教

區の教學普通講習會の席上、博士の所説の一端を聴き感ずるところあり、九月東京に於ける第七十七回教學高等講習會に二日間互に講演を請ひしに、聽講者の感銘深くこれが刊行の希望切なるものがあつたので、博士に執筆を煩し遂に本書の刊行を見るに至つたのである。

本書の内容は初め序篇に於て法然佛教の前提と機構とを明し、本論に入つて第一篇は日本と日本佛教の下に、神の國と人の國、神道と佛法、天照大御神、祭政教一奩、國體と國民道德と教學、肉身的と法身的等の諸項を史實に徴し乍ら、博士專攻の哲學、思想の方面より明快に論究して、時局下特に切實なる問題に指示を與へ第二篇は日本佛教の展開として佛教の公傳以前、佛教公傳紀とその背景、日本佛教の發足、十七條憲法、日本佛教の原理國家佛教、國家佛教の内外、平安佛教の歸結等の題下に日本佛教の特異性を詳説し、第三篇は法然佛教として、法然佛教序觀、新宗開創、法然上人の宗教體承、選擇本願念佛、

平等の慈悲、萬民翼賛の教法の諸項の下に如何に法然上人の佛教がわが國體思想に冥融し萬民翼賛の教法たるに適應するかを理路整然と明説してある。

法然上人の淨土教、選擇本願の念佛の教法とわが國體思想との關係は、實に刻下の緊要なる問題であつて宗侶の正しき認識を要するものであるが、本書の如きは何ら偏するところなく、學究的に思想的に論述され、しかも著者の敬虔なる信仰的態度が一貫して紙背に流れてゐるのは、實に本書の價値を高めるものであつて、私は先づ宗侶諸氏に漏れなく一書を推奨するものであつて、更に宗の内外を通じ江湖に本書の普及されむことを、獨り淨土一宗のためといふのでなく、わが皇國の文教のために切望するものである。

本書の内容價値については、巻頭に掲げられた左記著者の序文の一節がよくこれを示してゐる。

「今私はこの日本文教の原型的意義をば法然上人の宗教觀に見出し、そうして奥深く

支那精神と結合しながらも、わが國體思想の面目の貫通せる性格をば論述せんとするのである。わが「大和」の建前として排他はもとより不可であらうが、追隨も取るべきではない。過去の文教史的展開を餘すところなく包み生かして、しかも獨創的觀點の下にわが國體思想の實想を全からしめる。他國の精神的基底にまでも相通して、しかもわが國ならではと思はしめる新宗を開創する。

これが法然佛教の偉觀であり、皇紀二十七世紀の劈頭にも、なほこれを反省すべきゆえんである。日本文教の機構を指示し、日本佛教の實を結んで、一世を感動せしめた法然佛教は七百數十年の傳統を經た今日、單に淨土一宗の法然教學から、日本の法然教學として見直さるべきではなからうか」云々

(菊判總クロース上製本 定價二圓二十錢 送料十錢 法然上人續仰會發行)

山本幹夫博士著

「法然佛教とわが國體思想」を讀む

吉野翠幹

山本幹夫博士の「法然佛教とわが國體思想」は大部以前から評判になつてゐたし、好評を拍してゐたので、これが上梓を心待ちにしてゐたが、やうやく續仰會から刊行されて喜びに耐へない。

これまで法然上人の淨土宗開創を意義づけ、その根本を窺ふのに、古都六宗から平安佛教となり、これが鎌倉に到つて淨土宗となつた史的發展の上から試みた説明は從來とも決して目新しい方法のものでないのであり、そして本書も亦この方法によつて論述されてゐるのであるが、それであつても本書の他に全く趣を異にするところのあるわけは次の二點による特色であらうと思ふ。

即ち先づ第一に、著者がわが國體思想について確固たる信念を有し、この信念を通して法然佛教を、更に又法然佛教に到るまでの日本佛教全般をみてゐることである。著者が明確なる國體思想の持ちぬしであることは更めて云ふまでもない當然のことであるが、しかしこの信念を通して、この史觀にてらして日本佛教の展開を意義づけたことは、一つの新しい方向を示したと云つて云へないこともないやうに思ふ。例へば著者がわが國を以て「神の國」として特徴づけるにしても、「人の國」と對比して初めて斷ずる如き、著者の用意の一端が窺へるであらう。そして佛法こそ神道の國柄にふさはしい教法であり、わが國を「大乘相應の地」として意義づけてゐるところにも、その結論は別に新しいものではないながら、矢張り著者の史觀のひらめきがあつて、決して舊來の常套をふんだものではない。だからこそ一部論者の好んで口にする如く單に神道を根本とし、儒教佛教を枝葉或ひは花實であるとみるやうな觀點のもとには、

わが國體思想の面目が十分に顯揚され得ないであらうと斷じるところにも、新しい力強さが認められるのである。斯くて著者自らも「皇國でこそ開宗されもすると思はれる淨土宗を基礎づけた法然教學」だけに、これらが「神國の建前に立つわが國の教法として、いかに見らるべきかを論明せんとするのが本論の問題なのである」と云つてゐるのをみても、本書の企圖を明らかに観ることが出来る。更に又著書が「萬學に精通してしかも戒、定、慧の權化ともいふべき法然上人が無智の身に伍して凡夫報土往生の本願宗教の立宗」をなしたこの教法こそ「わが國體思想にふさはしい教法として、これ以上のものがはたしてあり得るであらうか」と述べ、「ここに私は萬民翼賛の教法を見出さざるを得ない」とも論斷してゐる。

次に本書の特長とすべきことは著者が單に學究の人ばかりでなく、従つて本書が法然佛教の史的論證を試みたところ止まつてゐないことである。勿論著者は豊富な學才

によつて、法然佛教を縱横に考證してゐる。しかし若し如何に精緻な考證が試みられても、それが單なる學究であり、一つの史觀の把握に過ぎぬものであつたなら、或ひは本書に満足し得なかつたかも知れぬ。然るに幸ひなことに著者は心から法然佛教を平等の慈悲を建前に萬民翼賛の教法を國民の心魂徹せしめたものとして讃歎し、法然上人を彌陀の化身として鑽仰してゐるのである。右に引用した著者の言葉にも窺はれるやうに著者の心から湧き出する信仰の光によつて一個の史觀が輝いてゐるといへよう。さればこの教法を以て「日本人として生れた歡喜、光明に浴するゆゑんの教法」であると、史的あとづけから更に一步を進めて、われ／＼自身の今後にも自から觸れるわけである。

即ち本書の明示することこそ獨り現下の佛教徒のみならず廣く文化人の欲求の一つを滿す所以でもあらう。翼賛の宗教體系を把握せんとする者に敢へて一讀をすめる所以である。



法然上人に物を聽くの會

— 大原問答 —

小西存祐

三問答の記録

一

大原問答が文治二年、前述の様な意味で、大原で閉鎖せられたといふ事實については、各種の文献に徴して、毛頭疑ふべき餘地は無い譯であるが、然らば當時、その問答の内容なり状況なりを、何か書き誌したものが今日傳つてゐるかと思ふに、現行の『大原談義聞書鈔』(卷)が、即ちそれだと言ふのである。

處がこの聞書鈔が、一般に世の中にその存在の知られる様になつたのは、足利六代の將軍義教公の時、小石川傳通院の開山了譽聖岡上人の高足西譽聖聽上人が、それに『見聞』といふ一巻の註釋を書かれてからのことである。問題は、そこから色々と湧いて

くるのである。

尤もこの聞書鈔には、西師の時に、既に一二の異本が在つたやうで、同見聞の記事から觀ると、聖岡上人の時、明かに二種の異本の存在してゐたことが推測される。

されば徳川の中期末、佛元といふ學者も、その著『纂釋』といふものゝ中に、今の異本について、凡そ本書の異本、西師の所覽二本、今の覽るところ三本——といふことを申してゐる。

そしてその「二本は、前に言つた聖岡上人の二本であることは言ふ迄もないが、「三本」といふは詳らかでない。けれども『同書』第十九卷に、中興本、應永本、古本の名が見へてゐる。多分それを指すものと思はれる。

二

この中の中興本といふは、最後の總起分をトップに置いた聖岡上人の改訂本で、その永正初年(延利十)の古寫本が、いま現に京都百萬遍知恩寺の什寶として傳つてゐる。この本は、同寺の第二十五世傳譽慶秀上人が、大永二年(二十二代)御柏原天皇の勅詔を奉じ、宮中に大原問答を御進講申上げた時(三水記)、その講本に用ひたと稱するもので、近年淨土宗寶として指定されたものである。彼の徹定僧正が、『蓮門經籍鈔』の註に、定嘗觀三文龜永正問之寫本と在るは、この「百山本」を指して申されたものであつたことは疑ない。天明の初(徳川十代)め本所靈山寺の第十六世鸞山上人の開板にかゝる『大原問答鈔』も、この系統に屬するものである。

次に應永本は、西譽上人が了譽上人から傳授をせられた所のもので、即ち「見聞」所釋の原本である。今日一般に「大原談義聞書鈔」として坊間に流布してゐるものは、大抵皆この系統に屬したものである。

最後に古本といふは、『印板種類辨』の中に「建曆年中開板」と稱するもので、今のは未だ何處にも發見されてゐないが、先の佛元師の『纂釋』のなかに、二回までそれが引用對照されてゐるところから見ると、佛元師の頃(の初)には、猶ほ世の中に存在してゐたことが解る。

『長西錄』追加の「大原十二問答集一卷法然上人作」と在

るは、或はこの建曆本のことを言つたものであつたかも知れないが、何しろ現存してゐないのであるから、能くは解らない。

三

それで今日、大原談義の「聞書鈔」と稱するものには、前述の西師所覽の二本が現存してゐる譯であるが、是等の二本は、謂はゆる異本であつて、その叙述の體裁等については互ひに相前後した所もあるが、その思想的內容に至つては全く變つた所はない。夫ゆへわれ／＼はこの聞書鈔を通じて、當時わが御房と諸宗の學匠との間に交された問答の内容を窺ふことが出来る譯である。然し問題は、たゞ已上で盡されたといふ譯ではない。猶ほ一つ重要な問題が残つてゐる。夫れはその「聞書」といふは、全體誰の聞書であるのかと云ふことである。

それに就いて、本書の最初の註釋である西師の「見聞」に、聞書とは聖覺法印、上人の説に任せて之を書す。所説廣多なれども且らく要を取つて之を記す、故に抄(鈔)と云ふ。因つて撰號をば、上人説聖覺記と謂ふ可し——と言つて在る。

爾來一般に、この「見聞」の説が通用することになつてゐるのであるが、然し又た大に疑問となる點もあり、亦それを辨護する説もあつて、未だ定説とは無い。又た一説では、聖岡上人の假托の作ではあるまいか、などいふ説もあるが、何うやらそこいら

が、事實ではないかと自分も考へてゐる。

尤も、聖岡上人の作だといつても、徹頭徹尾上人の創作だといふ意味ではないので、自分の推測する所では、最初聖覺法印か誰かに、さうした原始の記録が在つて、それが先に謂はゆる建曆本の大原問答、或は大原十二問答集といふ様なものではなかつたかと思ふ。そしてその原始の記録を、例の問師がその一流の立場から、大に筆を加へ、今の謂はゆる「大原談義問書鈔」といふものが出来てきたのではないかと想像する。

四

何づれにしても今の問書鈔は、何らか先だつて存在した古い記録に基いて作られたものと、推測されるべき理由が多分に有るので、それが何人の筆であつたにしても、恰度大乘經典が、佛説として信用されるゝと同様に在いて、當時の問答の内容を傳へたものと觀て、ふかないと考へる。

話がだいぶ考證めいたことになつて、讀者に或は迷惑であつたかも知れないが、この問答の内容について、基本的な問題でもあるので、敢て一言つけ加へて置いた次第である。

尚ほ本問題については、専修道場の『専修學報』第七號に、稍や詳細な解説を掲げて置きましたから、有志の方は、それを参照

して頂きたい。

陸海軍病院慰問「浄土」

寄附者芳名(略敬稱)

- 三圓六十錢 朝鮮永川郡新寧面城洞 青山源三郎
- 一圓二十錢 三原市 須波町 地福寺
- 二圓 酒田市 南千日堂 林昌寺
- 一圓 酒田市 今町 善導寺
- 一圓 酒田市 南千日堂 淨徳寺
- 一圓 酒田市 南千日堂 寶樹院
- 一圓二十錢 大阪市住吉區帝塚山中三ノ四三 澤和子
- 二圓五十錢 三重縣飯南郡松尾村立野 森本晉松
- 三圓六十錢 秋田縣能代市長根町 西福寺
- 二圓四十錢 同 光久寺
- 一圓三十錢 臺中州北斗郡溪州庄 青柳ユサ
- 五圓 北海道北見國紋別町 顯正寺
- 四圓二十錢 愛知縣津島町 安部圓導
- 二十圓 芦屋安樂寺十五年度 五重同行有志
- 二圓四十錢 世田谷區下馬町三ノ七二一 森鐵次郎



筋木大輪 清

みんな句になつて涼しい朝となり

評 昔に昔を重ねた涼の스가スガしい朝原本歌によいものである。努力に報ひられた嬉しい朝と居る。朝と居るとしてジツと眺めても見た。

筋木大輪 清

花咲かす土に誠の心あり

評 川柳は韻語になつていけず、金言になつていけず六ヶしい。川柳に軽味といふことも、あながち捨てられぬ。それのみ熱心する事はよくないが、そうしただけの要素を我が身に備へて置く要はある。そこで話せる人間となるのである。さうした土壘が出来てから川柳作家は時に自分の句を見るを、我句に必ずしも満足しきれぬ様になるであらう。

小梅市 中村 善祐

大陸の兄と逢つてる夢の中

評 「大陸の兄と昨夜夢で逢ひ」が原句、失禮を顧みず加筆した。年中作つてる連中には平凡の句、初心の方なら感心な句、小梅には古く五八八派の人も居るし、番茶の連中も居る。大いにやつてほしい。

深川細田初枝

ふつくりと食べたよな兒の手足

評 ふつくりが生命、ほんたうに誰でもそう思ふ。誰でもそう思ふから、なるほどと感ずる。

山口十一 舍純信

身を捨てて知らるる馬鹿の面白味

評 大悟の一として聞きたい。自棄の方で無い方にした。

小梅平井正念

生きてゐる草花陽のまま風のまま

評 人生の一面をヂツと見て居る句、作者は内容的に何か捉まうと近頃苦心してゐるのよく見へる。こういふ方は偶には感生時を試みるよとい。

鳥山大輪 靈海

降ることが違つて音のちがふ雨

亡き夫の影もうつるか益燈籠

大阪鳥本八重

出る欠仲かみしめて居る訓示なり

噴水の一下所雲を映すま

評 原句「噴水の清いが雲を映して」

岸和田 田 秋芳

猫一つ手足伸して居たりけり

京都永田七郎

降れば降る降らぬ小言なり

鳥山町 大輪 清

生も死もおかまいなしと居て見たき

大分縣 加 ずを

先生の言ふた朝だけ掃除する

福島縣 潮 谷 静山

足下も見ずにかけ出す山毒

北海道 花 田 麻往

来て見ての日本へみんを目を見はり

鳥山 萬壽 云海

一帖に我が一生がはいるなり

小梅平井 善慈

落ちて受く一水の味しかと知る

大阪鳥本 八重

兄弟の仲が直つて母の近く

福田 八雲 みち

蚊の聲を遠く聞いてる肱枕

鳥木 鳥山 云海

人並に稼ぐ中から詩作る

日本橋 松 本 幸

蓋水 蓮花

母ほどの人に出逢はず母と住み

梅の實の無邪氣さ少しづつ紅し

何は無けれど子を得て心腹はへり

きつちりと着てる粗服に氣押さ

れる

溪流とどろ何も語らず掌をささ

病人の顔を金魚の方も倦

アルバムの順に小さく歴史持つ

職賤しからず尊き汗を愧

歩には歩の務め小さき火華する

リボン流行修理不能の靴と歩む

因襲をしつかと抱へて零落れる

女々しさを叱り子の手を温める

子に會へて靴一つをすく渡し

なんぼなんでも鮭買ふ列へは人

にくい

物の香のぢかに流れる裏通り

早川 右近

東 信木 郎

房川 素生

坂口 丘翁

山本 栄道郎

角本 善郎

投稿規定
はがき一回句數に制限なし「淨土」編輯部柳壇係あてに送ること

會 員 通 信

自然の道

岩國市 勝野傳之助

人はみな役立たぬことに心をい
ため、氣を惱み、この貴い一生を
病氣や貧苦に惱み、徒らに安樂の
世界を求めんと迷ひ苦しんでゐま
す。これみな自我の慾望から出る
のです。早く自然の道理にかえり

特志寄附者芳名

師僧父母追恩のために本會事
業資金にと特志寄附下されまし
た。
一金五十圓也
大阪市天王寺區生玉前寺町水醫寺
醍醐 懸海氏

立還らねばなりません。天地一切



「いかがお暮しですか」東京荏原區 阿部千代(畫)

のものは因
果の道理に
よつて現れ
たもので
す。私等の
この息は空
氣の力、こ
の命は天命
の力、この
五體は地水

火風の集まつた姿でみな自然の働
きである。生きてゐるのも天地す
べてのものから生かされてゐるの
です。私等は感謝せずにはゐられ
ません。智慧は天地一切の道理を
知つて自ら覺り、慈悲は修養の力
によつて天地一體となつて眞實誠
心を現して他を覺します。修養と
はたゞ南無阿彌陀佛と行住座臥に
念佛を相續すれば佛心大慈悲と現
れます。

のものは因
果の道理に
よつて現れ
たもので
す。私等の
この息は空
氣の力、こ
の命は天命
の力、この
五體は地水

無學者には意味が解らず、困つて
ゐましたが、ある日大阪大丸にて
淨土なる文字を見て早速買つて讀
んだところ、自分のやうなもので
も不意に讀み得られ、信仰の道に
入るにはこれが一番だと感じまし
た。讀む内には未だ解らぬ所が出
て來ますが、何れ努力しまして解
るやうになりたいと思ひます、何
卒御指導下さいませ。(神戸市聳合
區東座通四ノ十三岩岡正之助)

◇小生未だ若輩のものにて何も存
せぬ赤子同様のものです。そして
宗教なるものを聞くことは嫌ひで
した。佛教は老人の聞くべきもの
と思つてゐましたが、友人より種
々信仰することによつて人間が安
心した生活に入ることが出来るこ
とを聞きまして、成程と感じ種々
と書籍を見るが殆んど自分の如き
(道)

◇季候不順の折から會員のみな様には益々御健勝のことゝ存じます。小生儀残念ながら病に罹り重大時局を控へて病院に療養さしていたゞいてゐます。先日「淨土」を拜讀いたし信行の道に入りたい

産業報國會修養會で本會から戸松學瑛師の出講

大井伊藤町株式會社福原光機の従業員から組織されてゐる産業報國會では去る八月一日午後八時から同社福原寮で修養講演會を開催したので本會から戸松學瑛、島野禎祥兩氏を派遣した。戸松氏は「おがむ心」と題して約一時間の熱辯を振ひ一同に多大の感銘を與へた。尚同社々長福原政男氏は困苦精勵の青年産業人である。

と感じてゐます。お念佛の道に入るには先づ何うしたらよいかお教へ下さい。佛の加護により一日も早く快復して再び第一線に活躍いたしたいと念じてゐます。(吳海軍病院第四病舎、吉本喜代三)

◇小生毎度御指導をいたゞいてゐます。病床にあつても希望と喜びとに明朗な日々を暮させていたゞけるのも全く法然さまのおかけです。一言お禮を申し上げます。

(名古屋川口生)

◇「淨土」を愛讀いたしてからは佛さまのお念佛が宿つておるためか起きても寝ても佛様のことが思ひ出されぬことがありません。先日夢にみすばらしい乞食があらはれて、わが名を唱へなさいと南無阿彌陀佛と教へてくれました。そこでお念佛を唱へてみると、向ふの方にも聲がします。聲をたよ

りに歩いてゆくと廣い野原に出て、お寺があり、そこに阿彌陀さまと觀音、勢至さまの三體が飾られてゐました。手を合せてお念佛を唱へましたら佛さまが光明をかがやかせて下されました。私の目の前は光りで一ぱいになり、私の心も明るくなりました。私は人間が疑ひ深く佛さまのやうな情け深い心でお念佛を唱へる人がないの

で、何も持たないきかない乞食の人が私は佛さまの光を教へてくれたと思ひました。

(青森縣東津輕郡平館村丸尾久一)

山本幹夫著 法然佛敎と

わが國體思想 刊行さる

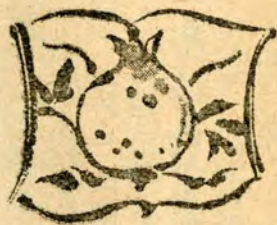
大部以前から評判になつてゐただけあつて豫約申込みが殺到してゐた本書が、やうやく刊行されました。時局下にあつてお念佛の生活により御奉公に努めてゐる者にとつて、萬民翼賛の教法を史的に基礎づけた本書こそは是非一讀をおすゝめしたい好著です。

淨き友の會 信仰坐談會案内

- 一、日時 九月七日(第一日曜)午後七時
時廿八日(第四日曜)より
- 一、講題 大乘起信論 中村辨康先生
- 一、場所 東京市本郷區東片町七八(白山上)橋本方

(電話小石川 四九七六)

(來聽歡迎) 淨き友の會幹事



聖典
講義

阿彌陀さまの、ことども

— 觀無量壽經眞身觀(その三) —

中 村 辨 康

(四) 佛の身量及び形相

如來様に人格的な要素がある限り、その形相とか身量とか屬性とか云ふものが考へられない筈はありません。然しながら一口に「心身土」と申しますやうに、如來様のおかだとお心とその世界との三は即一的なものでありますから、人間のやうな身量や形相ではかりではない筈であります。然しその邊の消息がよく分りません爲に、つい人間的に思ひ易く、しかも何とはなしに何か矛盾も感ぜられますので、信がどうしてもハツキリしないやうです。つまり如來の身量形相を人間的な存在観の上にのみ考へるからであらうと思ひます。

今「眞身觀文」に説くところの身量や形相を拾ひ上げ

て見ますと

一、身量

二、身量

百千萬億の夜摩天の閻浮檀金の色の如し。(夜摩天は人間の世界よりもすべてが百四十六萬倍であります、そのまた百千萬億倍と云ふのでありますから到底私達人間の想像の及ぶところではありません)

六十萬億那由他恒河沙由旬なり。(那由他は百萬億のことですからその六十萬億倍即ち六千萬億であり、それに恒河沙と云ふものを掛けなくてはなりません、その砂の數量は全く判りません。随つてそれは暫く考慮の外に置いて計算しても、(一由旬は十二哩ですからそれをかけると)七二〇、〇〇〇、〇〇〇億

三、白毫

哩となつて地球の直径(八千八十哩)の約九十萬億倍の高さで全く考慮の餘地はありません。

五須彌山の如し。(須彌山の下に金輪水輪を除外しても八萬四千由旬の二倍即ち十六萬八千由旬、哩數にして二百〇一萬六千哩が一須彌山の高さであります、その五倍即ち一千八萬哩の高さと、また須彌山の面積は一六三、七九八、三三八、二七二、一八四平方哩でありますから、その五倍の廣さを持つのが白毫相であるわけで、之れまた到底人智では考へられせん)

四、佛眼

四大海水の如し(三十三萬六千由旬即ち四、〇三二、〇〇〇哩の廣さであります)

五、圓光

百億三千大千世界の如し(須彌山の直径十二億三千四百五十五由旬の一萬億倍で、哩數に直すとそれのまた十二倍になります)

また圓光の中に百萬億那由他恒河沙の化佛あり一一の化佛に衆多無数の菩薩あり。(圓光の廣さも私達の想像以外であります)

ざつとこんなやうな具合ですから、とても問題にはなら

ないのです。この問題にならない數量が、量にして無量、數にして非數を示すものであり、結局形相を説きながら「無相の相」を云つて居るのでありますから、強いて端的に日本流に言へば如來様は天地一杯の御からだでありお姿であると云ふより外に方法がないのであつて、謂ゆる「正受三昧」所見の上では善導大師のおつしやつて居るやうに「内外の覺感が滅し」て人間が考へるやうな「想見」を超えたものであるわけです。然しそれでは何にもならず、また知ることさへ出來ないのでから暫く「正受」への手段として「相見」を借用してこんな言ひかたを採用して居るのでせう。従つその事を「思惟」とも云ひ「未だ多く明了ならず」とも云はれるのであらうと思ひます。

元來私達の「思想」や「言葉」は局限されて居りますから、その意味するところは一部分だけであつて全體を現はすことが出來ません。さればと云つて外に何うにも仕方がありません。だから「指方立相」と云ふことは誠に止むを得ない譯であります。また「指方立相」とは「方相を指立す」と即ちものごとをさししめすことであつて、このこととなくしてはものを言ふことも生活することも出來ないので、つまり私達は二六事中一から十まで方相を指立しつゝ生活して居るのです。

然るに日常の小さいことはそれで間に合つて居るのであり、また之なくしては何うにもならないから別に問題とはして居ないのですけれども、一度これが宗教のことになりますと、誠にことが面倒になつて兎角疑ひをさしはさみたくなりますから、何うしても特別の言葉使ひを以て無理な説明をして居るのです。しかもその内容をよく精細に調べて見ますと、前述のやうに相を立てながらしかも無相を説くと云ふやりかたでありまして、實は誠に巧妙をきはめて居るのであります。かう云ふ言ひかたは西洋人などには夢寢にだに覗ひ知ることは出来ないでせう。このやうに幽遠な哲理を具體的な現實的な言葉で示めて居るこの「指方立相」は全く中途半端な人には分らないことです。だから理窟なしにそのまゝ受け入れるか、さもなければ求道の苦悶を續けたのちかでなければならぬのでもあります。

何れはともあれ、如來様の身量や形相は、到底私達凡夫には分らないことなのです。然し何故にこんな分らない言ひ方をしながらも人間のやうなお姿として表現されて居るのでせうか。然し之は相手が人間だからと云ふ一言で盡るでせう。如來様は「無量相」でましますから、何のやうなお姿でもよい筈ですが、人間でなくては如來様の御心は分らず如來様のお力も分りません。随つて人に對しては一番

親しまれ易いお姿として、あのやうに表現されたのでありませう。觀音様でさへ三十三身を現じて居られるではありませんか。だから佛像の何の部分を見ても圓滿であり無邪氣の相であります。指一本、指の關節一つ、何んなに小さく切り離して見ても皆な美しいものです。つまり個々の圓滿相が綜合されて一つの立體が出来上がつて居るのであります、單に藝術品としましても實に何とも云はれない豊かさ美しさ麗らかさなどが現はされて居て人々に愛好されて居るのです。つまり天地一切の形相の中では、人間の形相が一番貴いからであります。

(五) 佛の心身土

私達のからだは單に五尺に過ぎませんけれども、心は相當に廣い領域を持つことが出来るやうです。つまり見聞が廣ければ廣い程、心の領域も廣くなるわけです。そしてその心の領域の廣さに應じて私自身の世界も廣くなるのであり、たとへ九尺二間の長屋に住んで居たとて、それは寢起をする場所に過ぎないのであつて、誰にしても自分の世界がその九尺二間だけだとは思つて居りませう。

況して如來様は天地に満つるおからだであり、天地と共に窮りなき無量の壽命であり、十方世界を照らす無限の光

明であり、十方を覆ふて餘すなき大慈悲でありますから、如来様の世界もまた無限無邊際でそのまゝ如来様の御からだでもありお心でもあるのです。だから私達は實には如来様の御心の中に居るのであり、おからだの中に居るのであります。心眼いまだ開けざるが故に「淨土ならざる世界に住んで居る」と思つて居るのであります。それは恰度「一水四見」の譬への人間は水と見、魚は空氣と見、餓鬼は火と見、天人は琉璃地と見るやうに、それぞれの業感の然らしむるものであつて仕方がないのです。私達のからだは臭穢であり短命であり、私のこゝろは醜惡であり偽善であり、私達の世界は濁増であり煩鎖であつて其處には涙と苦悶とが充ちて居るのです。然し一度信仰の眼が開け追々に行歩がすゝめられて行きさへすれば、私達の白道は坦々として淨土が眼前に展開されるであります。凡ては業感です。ですから心眼を開かせて業を轉じかへなくてはいけないのだと思ひます。維摩經には「心淨ければその土淨し」と云つて居ます。法然上人は

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて

淨土の莊嚴見るぞうれしき

と云つて居られます。

また「十方に淨土がある」と云はれては居りますけれど

も、それも畢竟は阿彌陀の淨土で部分的所感に過ぎないのではないでせうか。諸佛が所感した淨土、それは自分で建設しようとする成佛主義の上に立つたからこそで、部分的ではあるけれども彌陀の淨土たることに於ては異りはないのだと思ひます。楞伽經の「諸佛は阿彌陀佛國中より出づ」の言葉は、其邊の消息を物語つて餘蘊がありません。そこに行くとは往生主義に立つものは本當に幸せです。自分の全部をひつさげて如来の淨土の中に飛び込んで行くからです。つまり全分をまかせ切つて「虚にして往き實にして歸る」ことが出来るからです。

眞身觀には「此事を見る者は十方一切の諸佛を見る」と云つて居るではありませんか。また「圓光の中に於ては百萬億那由佉恒河沙の化佛あり」と云つて居るではありませんか。又「是の觀を作すをば一切の佛身を觀すと名づく」と云つて居るではありませんか。諸佛は結局阿彌陀佛の一方に過ぎないのです。諸佛とは畢竟「未完成佛」であると思ひます。と云つて決して落しめて居るものではありません。三月月でも十五夜の月でも月そのものに變りはないと同じです。従つて諸佛の淨土も阿彌陀の淨土に比すれば「未完成土」と云へませう。阿彌陀佛土の一部分だからです。阿彌陀佛は天地宇宙の「凡て」なのです。一切の佛も一

切の世界も皆な阿彌陀様の中のものです。少くとも私達にはさうとしか信ぜられませんが。如來様のおからだもおこゝろもお淨土も皆な「無量」であり「無邊」でましますのですから、一切がその中に包まれて居るのは當然であります。唯だこちらの見かたに依つて色々に見るので、「身」と「心」と「土」とは見かたの相違に過ぎません。善導大師に依りますと阿彌陀様のおからだもお淨土も凡ては「四十八願」の願態から成立つて居ると申されます。即ち

四十八願酬因身——阿彌陀佛

四十八願莊嚴起——極樂淨土

一々誓願爲衆生——一切衆生

と云ふのですが、阿彌陀様は四十八願に依つて完成し、阿彌陀様の世界は四十八願に依つて構成されて居るのであつて、阿彌陀佛と阿彌陀淨土とは畢竟「一」であると同時にそれは皆な偏へに「一切衆生」の爲であると云ふのです。

つまり四十八願と云ふものは阿彌陀佛の爲でもなく阿彌陀佛の世界の爲でもなく「一切衆生」を完成する爲であり「一切衆生」を幸福ならしむる爲であり「一切衆生」をして覺醒せしむる爲にあるのだと云ふのです。

然るに諸佛の淨土にはそれぞれ個性があるだけにこのやうな「全一性」が現はれて居ないやうです。獨裁制であつ

たり機關説であつたりして居ります。それは丁度現世界の諸國が國家制度をそんな風にして居るやうなものです。ところが獨り我國のみは全一的であつて、彌陀淨土觀と日本國家觀とは均しい姿であります。このやうに理想的な彌陀淨土が現實的に日本國體の上に現はれて居ることを考へ合はせまうとき、私達自らの國民感情と宗教感情とは寸毫も矛盾を感ずることがないのでありまして私達は特にこのことを喜ばずには居られないのであります。

(六) 如來の壽命相と光明相

眞身觀文には如來様の壽命相は説かれて居りませんが、經題が既に「無量壽を觀する經」と云つて居るのですし、佛名を「無量壽佛」として取扱つて居るのでございますから、特別に「壽命相」を取り出す必要を認めなかつたからかとも思ひます。

また一面に如來様の身相が無量無邊であつて「全宇宙のすべてである」とすれば、壽量もまた悠久無量であらねばならないので、わかり切つた事實として居るからかも知れません。佛教で云ふ大宇宙の壽量は私達の考へて居るやうなちつぽけなものではありません。生住壞滅を幾度繰返してもそれは單なる生滅の繰返しに過ぎず波の一起伏に過ぎ

ないと見て居るのですから實に言葉以上の悠久なものです。その上如来様の壽命相はその數多い屬性の中でもむしろ本質的なものであつて、凡てものは生命を無視しては考へられはしませんけれども、特に如来様の全部はその「無量壽」にあるとさへ云ひたいのです。事實「無量壽」であればこそ「衆生救済」も成り立ち得るのです。

また此の「壽命相」は阿彌陀佛の價值そのものの全的表現です。價値なきものは生命はありません。價値高きものは生命は永いです。随つて永遠無量の生命あるものは凡ての中の最高最勝最尊なるものであることを證明して居るわけです。しかもその價値は外へ向つては「輝き」として受取られ得るものでありますから、無量の生命あるものに「無量の光明」が具備されて居るのは當然なことです。

さればこそ此の「眞身觀文」には如来の「壽命相」よりもむしろ「光明相」が主として説かれて居るのであるの

あります。例へば「身のまろくの毛孔の一つ一つより須

彌山の如き光明を演出す」とか、又は「七萬五百六億種の相好の一つ一つから四萬四千の光明あり」とか、或はおか

らだの全體を包む「輝き」即ち圓光は「三千大千世界の百億倍である」とか極度の形容を以て云つて居るのであつて無量壽經の中に、「無量壽佛の威神光明最尊第一にして諸

佛の光明能く及ぶ能はざるどころなり」と、釋尊が推賞して居られるのも、なるほどと合點が行きます。

然かもその無數の光明は一一に念佛の衆生を攝取し玉ひ、決して捨てることなく、永遠の價値、永遠の覺醒の中に居らしめ給ふとのことでありますし、且つこの如来の光明相を見、又は知り得るものは、十方一切の諸佛を見、又は知るものであると説かれて居ります。何しろ圓光の中には「百億那由他恒河沙の化佛と無數の化菩薩」とが居られるのですから、是れまた當然のことでありまして、諸佛の母體でまします如来様を見、知るものが、何うして一切の諸佛を見、知り得ない筈があるでせうか。

是の故に阿彌陀佛への信心こそ、最も勝れ最もまさつて居るものだと思ひます。世の中は色々々の信仰がありますけれども、それら悉くは皆な部分的であつて全體的ではありません。信するならばこの阿彌陀佛への信に立たねばウソであります。損であります。

私達は此の意味に於いても本當に幸せ者であると、自ら省みて喜んでよいと存じます。

編輯後記

◇南佛印にわが皇軍が威風堂々
平和の上陸をしました。東亞共榮
圏の建設に更に一步を進めたもの
です。この進駐によつてわれわれ
國民は一層緊張の度を強めました
何か新しく事意が開けるにつれて
漸次緊張を増してゆくのをおぼへ
ます。

◇何の戦線の御苦勞も並々なら
ぬことを存じてゐますが、新たに
冬なほ暑い佛印にお働きの下する將
兵各位に心から感謝を捧げ、武運
長久を祈ります。

◇近頃、お念佛の生活を誤つて
考へる人があるやうですが、それ
らの人々の言葉を聞くと、何も知
らぬ爲の誤りが多いやうです。體
験し、研究もしないことを徒ら
に悪く云ふのは慎みませう。若し
化學者が試験管で研究してゐるの

を見て、あれは硝子の研究をして
ゐるのだと云つたら三歳の童子も
嘲ふことでせう。

◇各地方で水陸が跳梁し、災害
も大きかつた御様子です。御見舞
ひ申し上げます。農村は申すまで
もなく國家經濟の基礎をなしてゐ
ます。折角の御健闘を祈ります。

◇季候不順の折から會員各位の
御健勝を祈ります。時局柄お互ひ
は身體に注意して健康であること
が職域奉公の第一歩です。

◇初秋を迎へ、皆さまの活躍の
季節となりました。農家もお忙し
いことでせう。われわれは忙しい
ことに先づ感謝いたしませう。

◇吉田絃二郎先生から「淨土の
秋」をいただきました。先生は暑
さ寒さに頓著しないやうな御健勝
ぶりです。

◇岸本綾夫閣下から「震災記念
日を迎へ、防空訓練に寄す」を頂
戴しました。閣下は震災に際して

直接治安の維持に當られただけに
當事のことを残念がつてをられま
す。防空訓練にも矢張り精神的方
面が第一であると申されてゐる點
は大切なことです。

◇佐藤春夫先生はこのところ少
しく床についてをられました。が、
近く本誌に「阿彌陀さま」を再び
連載下さる豫定です。

◇「信仰實話」を募集しました
ら、早速淨土の原稿を頂戴いたし
感謝してゐますが、紙面の關係で
この月には發表出来ませんでした
悪からず御諒下ささい。

◇書籍の御註文には勝手ながら
代金引替は一切お断り申してゐま
すので、葉書での御註文は御容謝
下さい。また新刊書には特點があ
りますので會員の方は必ず會員で
ある旨お知らせ下さい。送金には

振替が一番便利で確實です。通信
欄には必ず御用向をお書き下さ
さい。

淨土 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和六年八月二十日印刷納本
昭和六年九月一日發行
(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野 正順
發行人 眞野 正順
印刷人 赤尾 光雄
東京市牛込區飯町七
印刷所 大日本印刷株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

配給元
日本出版配給株式會社
發行所 法然上人齋仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定
一部定價 金十二錢
(送料五厘)

會費 金一圓二十錢
一ヶ年 (送料共)

大野法道・中村辨康・前田聰瑞共著 (菊判 四五〇頁)

淨土宗讀本

定價 二圓五十錢
送料 二十一錢

法然上人鑽仰會編 (菊版二一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價 二十錢
送料 三錢

中村辨康著 (四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價 二十錢
送料 三錢

藤井實應編 (菊半裁一四四頁總ルビ付)

法然上人法語抄

定價 三十錢
送料 六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ボ総ルビ、三〇〇頁

法然上人別傳 掬水譚

定價 四圓五十錢
送料 二十二錢

淨土宗の教義、信仰、歴史、實際等、理論と信仰とのすべてが、一貫した體系のもとにしかも誰にも解るやうに説かれてゐます。この教界の指導的讀本により、先づ信仰の基礎づけをせられよ！

生、死、佛、本願、信と行、念佛の集ひ、社會生活、女性、家庭生活念佛の意義の各項目に別けて本宗の新鋭が、一般讀者を目標に新鮮な材料によつて解説した念佛信仰の手引！

非常時局下、人心の確固たる統一を期する時、一道の光明燦然として信仰の正道を指し示す。萬人のための宗教、淨土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。浩翰なる上人御遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んで句々金玉の聖句、これぞ生活の根底である。

大毎、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放菴畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

法然上人鑽仰會

振替東京芝區公明會館
東京芝區公明會館
番七八一二八

廣島文理科大学教授
文學博士

山本幹夫 著

新刊 法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された法然佛

教を歴史的に解明す。時局下必讀の書!

日本佛教の發展が法然佛教に到つて初めて萬民翼賛の教法として現れ大成されるまでを總ゆる資料により解明されてゐる。

先づ日本佛教と日本國體とを中心にして、神國日本の教法として佛教が展開し來つた史的實相を示す本書こそ、淨土教徒のみならず廣く萬人の知らんとするところである。わが國ならではと思はしめる新宗の開創の根據を説いて餘りなし

わが國體思想からみな
法然佛教の新しい基礎づけ

A5型クローズ裝箱入
價 二圓二十錢
送料 十錢
會員に限り
送料當方負擔

目次

序論

- 一、法然佛教の前提
- 二、法然佛教の機構

本論

第一編 日本と日本佛教

- 三、神の國と人の國
- 四、神道と佛法
- 五、天照大神
- 六、祭政・教一如
- 七、國體と國民道德と教學
- 八、肉身的と法身的

第二編 日本佛教の展開

- 九、佛教の公傳以前
- 一〇、佛教公傳紀とその背景
- 一一、日本佛教の發足
- 一二、十七條憲法
- 一三、日本佛教の原理
- 一四、國家佛教
- 一五、國家佛教の内外
- 一六、平安佛教の歸納

第三編

- 一六、法然佛教序觀
- 一七、新宗開創
- 一八、法然上人の宗教體系
- 一九、選擇本願念佛
- 二〇、平等の慈悲
- 二一、萬民翼賛の教法

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京芝區芝公園明照會館
東京芝區芝公園芝八二一七八番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十六年八月廿日印刷納本 昭和十六年九月一日發行

淨土 第七卷 第九號

定價金十二錢(送料)
滿鮮郵等金十三錢
外地定價